
なんかゲームしてたら武闘家少女が出てきちゃった

コンフェクト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんかゲームしてたら武闘家少女が出てきちゃった

【Nコード】

N9670U

【作者名】

コンフェクト

【あらすじ】

異世界トリップ。ただし逆。大好きなキャラがゲームから飛び出した。武闘家少女と妹と僕による二次元と三次元のお話。ギャグ多し。シリアスもあり。

出会いは突然に

きつと、人生の中で一度は思うだろう。ああ、こんな子が現実にいたらいいのに……と。

それは例えばTVの中で活躍するような有名女優だったり、アニメのキャラだったり。

僕の場合はその対象がゲームのキャラクターだ。

「ええつと……ここどこ？」

もし、自分の目の前に、『さっきまでプレイしていたRPGのキャラが三次元化』されていたら……あなたはどうします？ どうしますよ？

そう、僕の目の前には女の子がいた。

四畳半のそれなりに汚い部屋の真ん中にぽつんと、お尻と両手を下につけたポーズで。

白磁を思い起こさせるきめ細やかな肌と、徹底的に美と可愛さと萌えを追究させたようなスツとした顔立ち。その顔についた大きな蒼い目をぱちくりさせている。

銀色と水色の中間を表現したような流麗なロングヘア。黒い布服の上に羽織る形で純白のローブに身を包んだその姿はまさにファンタジーのキャラそのものだ。

「……………あ」

辺りを見回した彼女は部屋の中で佇んでいた僕と目が合う。

僕はというと、震えていた。

それは恐れから来る物ではなく、ましてや体調不良などから来る震えでもなく。

ただ純粹に、僕は感動していたのだ。感動に打ち震えていたのだ。

「く、く、くくく」

「く？」

自然と口から漏れ出ていた僕の声を拾うように、目の前の美少女が口を開く。

「く、クレアたああああん！」

「う、うわあっ！？ きゃあああっ！？」

僕は目の前の美少女に飛びついて抱き付いた！

そしてそのまま腰に手を回し、彼女の顔に自分の顔を近づけ、強引に唇を――――

が、彼女の右手から繰り出された高速の右ストレートが僕の顔面を捉え、そのまま意識はどこかに飛んだ。

彼女は暴力的

どうやら僕は気絶していたらしい。顔の表面が焼けたようにヒリヒリする。

目を開けた僕に最初に飛び込んできた映像は見目麗しい美少女だった。

心配した顔で僕を見つめている。

ああ、よく見るとクレアたんじゃないかあ。僕の好きなゲーム、『レイド・オン・サタン』に出てくる美少女武闘家。

ということは、これは夢か。まさか夢にクレアたんが出て来れるとは。今まで何度見ようと思って出て来てくれなかったのに、初めての経験だ。

よし、このまま夢の中で彼女とくんずほぐれつ――

「あ、起きた？」

風鈴が鳴るように美しい声が響いた。

やけにリアルだ。まるで本当に目の前にクレアたんが居るように――

「つて、本当に居るし！」

僕は歓喜の声を上げて体を起こした。そうだ、さっき突然僕の部屋に現れて、僕は殴られて。

……ということは、これは現実じゃないか！ 目の前にいるのは本物のクレアたん！ マジですか！？

「あの、とにかく状況を説明しなさいよね。ここはどこなのよ。そしてあなたは誰？」

クレアさんは困り顔で溜息を吐き、僕に問いかけた。

僕は興奮冷めやらずまま、自分が高校生男子であること、ここが日本であること、クレアさんがゲームのキャラであることを簡素に語った。

彼女は終始困惑の表情である。よくわからないことが多いのだろう、当たり前か。僕も興奮と困惑が入り交じって訳のわからない状態だ。

「牧場泰三＞＞マキバタイゾウ＜＜……タイゾーね」
「つつっ！」

クレアさんが僕の名前を読み上げた。すごい、名前を呼ばれているよ、僕。クレアさんに名前を呼ばれているよ。

僕の顔はきつと赤くなっていることだろう。浅名詩織ボイス（クレアさんの声優さん）だよ！？ その透き通るような繊細な声で今、僕自身の名前が呼ばれている！ これだけでご飯十杯はいける！

「な、なんでそんな恍惚の表情を……。あ、あたしも自己紹介しないとね。あたしの名前は――」

「クレア・リフィール、十七歳。身長百六十三センチの体重は四十八キログラム。スリムな体型だけど出るところは出てる僕好みの体型！ 好きな食べ物プロフィールだけで聞くと太った人間であるという印象を抱かれやすいピザ！ 特にチーズとトマトをふんだんに使った物が好み！ 血液型はAB型で、特技は硬貨を指で曲げること。スリーサイズは上から八十二、ごじゅうきゅ」

刹那、饒舌にクレアさんのプロフィールを語っていた僕の輪郭間際を凄まじい風圧が駆け抜けた。その原因は彼女の空を切る拳によるもの。

ていうか僕の判断があと一步遅かったらまともに食らっていた。

「あ、あつぶな！ また気絶したらどうするの！」

「その方があたしにとって最良の結果だと思うわよ！」

クレアさんのつり上がった瞳が僕を真っ直ぐに睨み付けている。高校二年生にしては童顔だと言われる僕の顔が潰れてしまうじゃないか。

クレアさんに殴られるのは嬉しくもあるけど、もう少しだけ手加減してもらいたい。

「っていうか、あんたって危険人物でしょ！ 紛れもなく！ さっきもいきなりあたしに抱き付いてきたし！」

「失礼な！ 僕は至って安全だよ！ 三度の飯よりクレアさんが好きなだけの存在だよ！」

「あんたの中での安全の基準が知りたいわよ！」

彼女は徹底的に僕に敵意の目を向けていた。隙あらば殴られそうだった。

仕方ない、いきなりこうして僕の前に現れたのだから、戸惑いでいっぱいだろう。僕自身もこの状況には心底びっくりなのだから。

と、とりあえず、彼女に現状を理解してもらわないと。

がんばればく

「つまり、あたしはこれの中に出てくる登場人物ってことね」

クレアさんはゲームの入っていた箱を見つめながら呟く。

このゲームはパソコンゲームである。ジャンルはRPG。

戦士、武闘家、魔法使い等の職業の中から一つを選び、その職種
の人間が広大な世界を旅して魔王を倒すという単純明快なゲームだ。
ちなみに仲間はおらず、ずっと最初から最後までキャラクターは
一人で戦い抜かないといけない。

「うん。ほら、箱にも描かれてるし、説明書にも載ってるでしょ？」

「本当だ……」

クレアさんは納得出来なさそうな顔で眉を潜めている。自分が異
世界にやってきたという現実を直視出来ないみたいだ。

二次元から三次元。にわかには信じがたい転移である。

「はあ、なんでこんなことになったのか……わけがわからないわ」

クレアさんは右手で頭を抑えて嘆く。

凛々しい姿も良いけど、悩みに悩むクレアさんの表情もたまらな
くいいなあ。

「いや、でも理由にはちょっとだけ心当たりがあるよ」

「へえ？ 聞かせなさいよ」

僕はドヤ顔で告げることにした。

「毎日毎日、片時も忘れずに『クレアさんと恋人同士になれますように』って願ってたからだと思うよ！」

「そんなのが理由になるかあっ！」

クレアさんの右腕が、今までにない最高レベルの勢いで僕の顔めがけて飛来した。

今の威力は恐らく、作中に登場するモンスターであってもノックアウトするレベルだ。

先ほどの経験が無ければ、たぶんともに食らっていた。

「く、クレアさん、照れ隠しだからって、その攻撃は僕が死んじやうよ」

「どれだけポジティブなのよあんたは！ 照れ隠しじゃないし！ 微塵もその気無いから！」

「えっ……嘘でしょ……？」

「なんでこの世の終わりみたいな顔してんのよ！」

僕は思案する。もしかして……クレアさんはあまり友好的じゃないのか？

『好き好き大好き、タイゾーくん』て感じじゃあ……、ないのか？ ないのか？

ていうかもとよりクレアさんは人に好意をストレートに表現するタイプではない。どちらかというとツンデレ系だ。

だから普段は暴力的な感じが続くんだろう。言葉にもトゲが多い。僕に危険が振りまかれることは多い。

「だがそれがいい！」

「……」

ニヤリと微笑む僕。

見るとクレアたんは汚物を見るような眼差しを向けていた。顔も呆れている様子だ。

「く、クレアたん？ 怒っちゃった？」

「通り越したわよ。はあ、もういいわ。……てか、その『たん』ってのは何なのよ。呼び捨てでいいわよ」

クレアたんから呼称の許可を頂いた。呼び捨てでいいらしい。
……呼び捨て……だと……？

「クククレレレ、レ、レ」

クレアたんを呼び捨てで呼ぼうと頑張る僕。
声は震え、肩は竦み、全身が悲鳴を上げる。
頑張れ、頑張れ、あと、もうちょっ――――

「うわあああ！ 恥ずかしくて言えないよ！」
「なんで!？」

クレアたんが白目で驚く。僕はあまりの恥ずかしさに悶えていた。
クレアたんを呼び捨てで呼ぶなんて……思いっきり意識してしま
う。

そんなこと、僕には耐えられない。恐れ多すぎて、嬉しすぎてっ！

「そ、その、やっぱり『クレアたん』のままがいいよ！ クレアた
んを呼び捨てで呼ぶなんて、脳みそがとろけそうだよっ！」

「あんたプロフィール語ってたとき呼び捨てだったわよねえ!？」

僕は沸騰する脳内をなんとか抑えようと必死で転げ回る。クレア

たんは転げ回る僕を見て『エライところにきてしまった』と言いたげな顔をしていたが今はどうでも良かった。

クレアたんがやってきたのだ。これで僕の一生の幸せは確保されたようなもの――

「お兄ちゃ――――」

そのとき僕の部屋のドアが開いた。

そこには、僕の妹のミヨが立っていた。

妹登場

僕の妹である牧場御代はドアを半開きにしながら固まっていた。理由は単純明快。彼女の視線は思いっきりクレアさんに釘付けだった。

「お、お兄ちゃんが……」

わなわなと体を震わせるミヨ。その顔は驚きを隠せていなかった。ミヨは中学三年生である。背丈は平均のそれより小さく、頭の高い位置に短いツインテール。灰色のスウェット上下に身を包んでいた。

「モテナさすぎるからって、ついにコスプレイヤーのデリ〇ルを呼んだぁー！」

「お、おい待て妹よ！」

叫びながら全力で走り去ろうとする妹を咄嗟に引き留め、その場に立ち止まらせる。

どうやら妹はむちゃくちゃ誤解している模様だった。

「お兄ちゃんがそんな不純なことをするわけがないだろう！」

「ゲームの女の子が好きな時点でもう不純だよ！」

よくわかっていらっしゃる妹だった。……………じゃなくて！

「別の発想は無いのか。もしかしたら、彼女、とかかもしれんだろ

う」

「そんなのお兄ちゃんに出来るわけ無いよ！」

「うっ……」

ミヨの言葉は大きな釘となり、僕の心臓に突き刺さった。く、悔しくなんかないもんねっ！

っていうかなんでデリ〇ルなんて単語を知っているのか謎だ。最近の若者は学習が早くて怖い。

「じゃあ、なんなの、あの人。お兄ちゃんの愛してるキャラみたいだったけど」

「それがな、聞いて驚くなよ、ミヨ。なんと本物のクレアたんがウチにやって来てくれたんだ！」

興奮して声が高鳴る僕。それを聞いたミヨの目の色がすうつと消えていく。

「……お兄ちゃん、そんなに生きることが辛かったんだね。受け止めようよ、現実を。確かに嫌なこともいっぱいあるかも知れないけれど、その分良いことだって、たくさん、あるよ。お兄ちゃんが何か悩んでるんだったら私が聞かし、出来ることだったら助けたり力になるよ？ だからあまり一人で悩んだり思い込んだりしないで、私に助けを求めてね、お兄ちゃん」

まるで鬱病患者を慰める際に見せるような顔をする妹だった。完全にイッちゃって人扱いされていた。

そんなミヨに僕は事のあらましを語ることにした。ゲームを終えたら傍にクレアたんがいたこと。僕のテンションがマックスなこと。始めは信じていなかったミヨも、僕の力説に嘘はないと感じたの

か、どうにか状況を説明することが出来た。

「ゲームの中から、出て来ちゃったってこと……だよね？」

「うん、その通りだな」

「それで、お兄ちゃんはどうするの？」

どうしよう。クレアさんが来てくれて舞い上がっていたものの、よく考えるとこの先、どうしよう。

大好きなクレアさんが来てくれた訳だけど、なんか問題も多い気がする。

この世に存在しない人がやってきた。言葉にすると簡単だけど事態は深刻な気がしないでもない。

まあ、僕は幸せだから無問題なんだけどね。

「ゲームの中に、送り返せないの？」

「そんな通販の返品のように言われてもなあ。……………どうやって？」

「……………」

妹が腕を組んで悩んでいた。数刻考えた後、ハッと閃いたように顔を上げる。

「パソコンの画面に、ぶっこむ」

「随分と抽象的だな、おい」

「だってそれしか考えられないよ！」

むーとむくれる妹。まあ僕も案は出てないわけだけど。

そういえばクレアさんが出て来たのは画面の中からじゃないはずだ。僕はずっとモニターに対面していたし。

ゲームを終えて、気づいたらそこにいた、という感じだった。

「と、とにかく私も会ってみるよ、クレアさんに」
「んじゃ、行こうか」

ここであーだこーだと話していても埒があかない。
僕達はクレアさんの待っている、僕の部屋に戻るのだった。

妹 絡む

「じー……」

「じー……」

「……あの、あんたたち何やってるわけ？」

僕とミヨは扉の縁からそれぞれちょこんと顔を出し、クレアさんを舐めるように見つめていた。

「その子は？」

「あ、ええと。私、お兄ちゃんの妹で……牧場御代って言います。よろしくお願いします」

誰なのかと尋ねるクレアさん。それに対しミヨはいたく丁寧に切り返していた。

その礼儀正しい姿勢に感銘を受けたのか、クレアさんはニッコリと笑いながら応対する。

あれ、なんか僕の時と大分、対応に違いが見られるような気がするんだけど。

「なんでも、ゲームの世界からやってきたそうですね？」

「ええと……そうなるのかな。信じたくはないけれど……」

ミヨが質問をする。溜息を吐きながらも、クレアさんは現状を受け止めている模様だった。

クレアさんの話によると、冒険の最中に気づいたらここに来ていたらしい。

その最中というのが、僕が先ほどまでゲームをプレイしていた部

分と同じであったため、どうやらゲームの中から抜け出てきたのは間違いないようである。

「やっぱり、僕の愛が起こした奇跡に違いないね！」

「ねえ、ミヨちゃん。あなたのお兄ちゃんていつもこうなの？」

「はい。クレアさんにぞっこんの、現実と妄想の区別がつかない変態野郎です」

高らかに喋る僕。なんだか妹とクレアたんから冷たい目線が飛んでいるような気がするけれども、気にしない。

「でも、お兄ちゃんがこうなっちゃったのにも訳があって……。お兄ちゃんの前、女の子に酷い振られ方したんです。その頃のお兄ちゃんはすごく病んでて……。どうしたらいいんだろうと思っていた私は、誕生日にゲームソフトをプレゼントしたんですけど。そしたらそのゲームに出てくる一人の女の子——つまり、クレアさんに大はまりしちゃって。それからです、お兄ちゃんが現実の女の子を見なくなったのは」

淡々と語る妹にクレアたんはなるほどと相槌を打っていた。

ああ、そういえばそんなこともあったな。しかし僕は今、クレアたんというパラダイスを手に入れているから無問題だ。

「——ッ、そ、そうだ！　よく考えたらクレアさんが全部悪いんだ！　クレアさんなんてキャラがいるせいでお兄ちゃんは二次元の女の子を愛する体質に……許さないよ！」

「え。ちょ、ちょっと待ちなさいよ！　それは逆恨みって奴でしょうよ！？　私に悪いところ何も無いじゃない！」

「クレアさんが魅力的なのが悪いんだよ！」

「あたしにどうしろってのよ！？」

「お、おいおい。二人ともその、落ち着いて……」

なんか二人が陰悪なムードになっていた。さっきまですごい和やかな雰囲気だったのに。

「あんまりふざけたこと言っていると、女の子であろうと容赦しないわよ？」

クレアたんが物凄い形相で拳の骨をぼきぼきと鳴らしていた。

その様子にミヨは一瞬だけ身をこわばらせるも、ふっと得意な顔でクレアたんを見据えた。

「ふっふん、いいのかな？」

「な、何がよ」

「もし、ここで私が大声を出してみたりしたら、どうなるかな？」

人がすっ飛んでくるよ。そしてクレアさんはこの世の人間じゃない、謎の、未知の人間だよ？ そんな人がおっぴらに暴れたりしたら、どうなるかなあ。クレアさんはこの世界じゃ戸籍も何もないわけだから、保証も何も無いし、奇異の目に晒されるよ。そして挙げ句の果てには学会の研究所へ……ふふふ」

「う、ううう……」

お、おお。なんか腕力では圧倒的に負けてるはずの我が妹が押し込んでいるぞ。

「どうしろってのよ……。あたしには魔王を倒すっていう使命があるんだから、あなたたちには構ってられないの。早くゲームの中とやらに戻してよ」

「そうだよ、お兄ちゃん。早く送り返そうよ。お兄ちゃんの衛生上も良くないよ」

ミヨとクレアさんの意見が一致していた。どうやら、クレアさんを早急に戻さないといけないみたいである。舞い上がっていた僕の心は見事に打ち砕かれた。

いや、でもせっかく来てくれたのだし、ううむ。

「同居って形は……ダメ？」

『ダメ』

ミヨとクレアさんの声がシンクロした。僕の意見はまるで通りませんでした。

出たり入ったり

「なあ、ミヨ。馬鹿なことを聞かかも知れないけど……」

「うん、お兄ちゃん」

「クレアさんは、どこに行った？」

ゲームを起動した途端、クレアさんがどこかに消えた。

僕はクレアさんがどんなゲームから飛び出してきたのかを教えようと、パソコンの前に座って『レイド・オン・サタン』を起動し、セーブデータをロードした直後——気づくと隣で見守っていたクレアさんが消えたのである。

僕とミヨは辺りをぐるぐると見回すが、どこにもクレアさんの姿は無く、ごく普通の僕の部屋であるだけだった。

「ゲームの中に戻っちゃったんじゃない？　それかもう夢だよ、私達は夢を見てたんだよ」

「いや、そんなわけあるはずないよ。だってこの顔の痛みがすごくリアルなんだ。さっきクレアさんに殴られたという事実が、本物である証拠だよ」

「悲しい現実の見据え方だね……」

僕にはしっかりとクレアさんにぶん殴られた記憶と痛みがある。転んで打った訳でもないし、電柱に顔をぶつけたとかいうオチでもない。

一体、クレアさんはどこに消えてしまったのか。僕とミヨは顔を見合わせる。

そして二人してパソコンの画面に目を吸い寄せる。

画面の中には3Dで表示されたクレアたんが居た。広大な野原に丘がぼつぼつと点在するフィールド。その中にクレアたんは立っている。

周りには少数のモンスターがうろついていた。主にスライムのような軟体性の敵や小型の鳥の敵。

要するにワールドマップという奴だ。

「それに、僕とミヨが同時に夢だか幻覚だかを見るって、ありえなくね？」

「まあそれはそうだね」

謎は深まるばかりだった。とりあえず僕とミヨは部屋の中を探索することにした。

押し入れのフスマを開けて中を覗いたりしてみるが、やっぱりクレアさんの姿はない。

「ゴミ箱の中にもいないよー、お兄ちゃん」

「お前探す気無いだろ!？」

妹のやる気がゼロだった。縦二十センチ程度のゴミ箱にクレアさんが入るものか。

僕は思案する。一体、彼女は何処へ。消えたのは、ゲームを始めてロードをした時辺り。現れたのは、ゲームを終えたとき。

そこから導き出される答えは――――

「まさか」

僕はもう一度パソコンの前に座り、ゲームのコントローラーを手を取った。

適当にその場でセーブをして保存し、ゲーム自体を終了させる。
そして僕とミヨは部屋の中をぐるりと見渡す。

『あ』

僕とミヨは二人して間の抜けた声を上げていた。

見てみると部屋の真ん中にちょこんと、正座して座っているクレアさんがいた。

目をぱちぱち開閉しながら、きょとんと佇んでいる。現状に認識が追いついていない、という様子だった。

クレアさんが、クレアさんが、戻ってきた。

「く、クレアたああああん！」

「せいっ」

「オウフツ！」

クレアさんは真顔で正拳突きを繰り出し、僕のボディーへとめりこんだ。

飛びかかった僕はその場で膝を付き、お腹の激痛に身を悶えながらその場に沈み込んだ。

大変痛い。けれどもクレアさんが戻ってきたという事実の嬉しさの方が勝っていた。

「あ、あれ？ クレアさん、戻ってきたの？」

「……………そうみたい」

彼女曰く、元の世界（RPGの中）に戻って安心し、さあ冒険の続きをするぞというところで気づくとこっちに来ていたらしい。

やっぱりそうだった。要するにクレアさんはゲームをやめると、こっちに来る。ゲームを始めると、消える。

つまりゲームをプレイしている間は向こうで生きていることになる、ということなのだろう。

「要するに、あたしってタイゾーの掌の上……?」

「そういうことになるね」

クレアたんはその事実を知ると、頭を抱えて唸りだした。感動しているんだろう。これからは僕の意志でクレアたんを召還したり出来るわけで、いつでも会えるということ。

「僕は今最高に嬉しい気分だよ!」

「あたしは最高に泣きたい気分よ!」

僕の夢は広がりまくっていた。

「あ、クレアたんのセーブデータをいっぱい作ったら、ハーレム状態に出来ないかな……」

「ならないと思うよ、お兄ちゃん……」

家族の絆

「というわけで、こちらがゲームの中から飛び出してきちゃったクレアたん」

「あらまあ」

クレアたんを紹介することにした。

うちはお父さんが海外勤務のため家にはいない。そのため手始めにお母さんに紹介することとする。

ゲームのキャラだと聞いて少しばかり面食らっていたお母さんだけれども、大して驚く素振りはなさそうである。

「えっと、クレアです。よろしくお願いします」

「はい。仲良くしてくださいね」

大きく微笑むお母さん。元々細い目がより一層細くなる。

天然パーマが掛かっているんじゃないかというふわふわとした長髪。

癒し系という表現が正しいゆるふわ系の母親である。

「お、お母さん？ 驚かないの？ 変だと思わないの？ お兄ちゃんของเกมから出て来たって、言ってるんだよ？」

ミヨは信じられないといった様子で語りかける。

異次元からのお客様が来たという事実にお母さんはまるで動じる姿勢を見せず。

「えっと……………それが、どうして驚くことになるのかしら？」

何が問題？　という感じで首をかしげるのだった。

「いいかしら、みーちゃん」

みーちゃんというのはお母さんがミヨを呼ぶ際の呼称だ。

お母さんは腰をかがめて目線の高さをミヨに合わせると、真面目な口調で言葉を発する。

「この世にはね、超常現象がありふれているのよ。有名な物だと神隠しっていうのがあってね。現世と別の世界があると仮定して、時空の歪みに人間が取り込まれたりする可能性が示唆されているの。科学が進歩したとはいえ、世界に広がる様々な謎は未だに解明出来ていないものなのよ。だから――――」

お母さんはより一層真面目な顔つきでミヨを見つめて言う。

「つまり、ゲームからいきなり人が飛び出しても――――まるで不思議なことではないのよ」

「いや、思いつきり不思議だよ！」

ミヨは冷静な意見で反論していた。

そこで頭を縦に振るような人が悪徳商法に騙されるのだろうか、と僕は内心想った。

「それにしても泰三、羨ましいわね。まさかゲームのキャラクターがこっちに来るなんて……。お母さんもね、昔に流行っていた漫画のキャラクターが好きで好きで。出てこないかなって、何度も思ったものよ。」

お母さんは昔を懐かしむように語り出す。

頬に掌を当てて心なしか惚気ているように見える。

「そう、アンドウレ様が出てこなかったから……私はお父さんと仕方なく結婚しちゃったのよ」

仕方なく結婚すんなし。

クレアさんとミヨは「この親にしてこの子ありだー!!」と言いたげな顔をしていた。



お母さんの好意でクレアさんに料理を振る舞うことになった。

僕がクレアさんはピザが好物だよと言うと、「こっちの世界にもピザがあるんだ」とクレアさんは喜んでいた。

木造テーブルの四席に僕とクレアたんが向かい合い、僕の隣にミヨ。ミヨの対面にお母さんという布陣だ。

「前にピザ作り教室でちょっとだけ習ったことがあるんだけど、上手く出来ていなかったらごめんなさいね」

「いえ、すごく美味しいです！」

クレアたんは上機嫌でピザを口に運んでいた。嬉々としたクレアたんの顔がたまらなくかわいい。

とろりと溶けたチーズがたっぷりとパン生地に乗っており、アクセントを加えるように刻まれたトマトがちりばめられている。

ゲームの世界から来た彼女だけど、こっちの世界でも食事は出来るようだ。

「そういえば、ミヨ」

「ん？ 何、お兄ちゃん」

「RPGの世界ってトイレとか見かけないけど、クレアたんてウ○コするのかな？」

「知らないよ！」

僕は真面目な疑問を隣にいたミヨにぶつけたのだけど、一蹴されてしまった。小声だったのでクレアたんとお母さんには聞かれていない。

それ以上そのことについて考えたら本気でセクハラ、変態だとミヨが言うので僕は渋々とその疑問を頭から遠ざけた。

「賑やかそうな家庭ですね」

「そうね、うちはお父さんが遠くに出ているけれど、大きな家庭問題も無いし、安泰ね。クレアちゃんの家族はどんな感じなのかしら？」

お母さんは何気ない質問をクレアたんに投げる。

僕は一瞬、その質問は止した方がいいと感じたが、クレアたんが特に気負っている風でもなく語り始めた。

「両親は、他界しています。後は弟が居るんですけど、弟はその……姿を消してしまって、失踪中なんです」

「あ……」

少しだけ顔に陰りを浮かべて話すクレアたん。
その内容にお母さんはごめんなさいと頭を下げるが、いえいえと

クレアたんは顔を上げて気にするでもなく話を続ける。

「魔王を倒せば、王国軍の方々に探してもらえることになっているんです。魔王を倒す旅、そして弟を捜し出す旅でもあるんです。本当は、弟を捜すことが目的で、魔王を倒すのは二の次……って言ったら、あれなんですけど」

クレアたんは自由都市クロテアという街で弟と二人暮らしだったという過去がある。

突如失踪してしまった弟リックを探すため、そして魔王を倒すという目的がクレアたんのストーリーであるのだ。

「あたし、急にすごい力を手に入れたんです。それこそ、モンスターを次々に倒していけるような大きな力を。そしたら何故だか私の頭の中に聞こえてきたんです、『マオウヲ、タオシテ』って。神様のお告げなのかも知れません」

そう、クレアたんはある日、強大な力を手に入れたのだ。

クレアたんは元々武道を習っていて強かったのだけれど、それでも女性である彼女に強さを求めるのには限界がある。

そんなクレアたんはある時、信じられない強さを手に入れる。大の男であろうと容赦なくぶちのめし、凶悪なモンスターであろうと薙ぎ倒す常識を逸した能力を。

「だから、あたしは絶対に弟を見つけて、魔王を倒すんです。そのためにはこの変た……タイゾーくんの力が必要になるわけです」

クレアたんはぐっと拳を握りしめて言う。そう、ゲームのキャラクターである彼女が、目的を成し遂げるにはプレイヤーである僕の手が必要不可欠となるわけだ。

「なら、きっと問題ないよ」

ミヨが満面の笑みを浮かべて喋っていた。

「お兄ちゃんはクレアさんを動かすことにおいては一流だと思うし。一度ゲームをクリアしたこともあるみたいだし、クレアさんの目的は絶対に達成出来るよ！」

ミヨの心強い一言で、談笑するクレアたん達。

その中で一人だけ、僕は心の底から笑えていなかった。顔がひきつっていたかもしれない。

血の気が引く、というのはこういう感覚なのか。もしくは背筋が凍り付くという感覚か。

クレアたんはゲームのキャラクターであり、その生き様はゲームのストーリー。

それを動かすのは僕。彼女の行き先を決めるのは、僕自身。

それらを踏まえて全てを考えたとき……僕は彼女がやってきたという現状の側面を、思い知ることになるのだった。

諦めなければ終わりじゃない

本来は薄暗く、常人では何も見えない闇の空間——そんな洞窟の奥地も、私の今の目ならば見渡せる。

ごつごつとした岩肌に囲まれた駄々広い空間に私はいる。

レンドット山。魔王が住むと言われる根城に辿り着くためにはこの山内を通過しなくてはいけない。

本来ならば楽に越えられるはず……なのだけれど。

「くく、これはこれは美味しそうな女がやってきたぞなもし」

私の目の前には魔物が佇んでいた。

人型に近い魔物で大きさとしては大の男、と言ったところである。しかし、両腕の肘から先が“植物”のようになっていた。

ツルのような長い一本の触手からは無数の鋭く伸びた棘が生えており、恐らくあの腕を使って雁字搦めにした人間を襲うのだろう。

現に、口は人間のそれではない。

明らかに吸引を目的とした形状だった。捕まえた人間をあの針のような口で突き刺し、一心不乱に体液を啜り取るのだろう。

こいつはレンドット山の山間を通過するために掘られていた洞窟の中心を根城にし、通行人の人々を襲っていたのだという。

おかげで周りにはつい先日まで体温が通っていたのであろう、力尽きて血に伏せている人達が幾人も在る。

その中には既に骨と化し、生前が男女のどちらであったのかすら判らなくなっている物も居る。

そんな酷い光景を見ても、大して心身が揺らがない今の私は果たして正常なのだろうか。

数多の魔物を倒してきたせいで、感覚が麻痺しているのかも知れない。

いや、でもきつとこれは推測だけ——あの魔物に同情したからというのもあると思う。

あいつはきつと、悪いことはしていない。

自分の主食がただ、『人間であった』という事実が、私達人類にとつて耐え難い不快な存在であっただけ。

裏を返せば、私もきつとやっていることは同じなのではないだろうか？

「残念だけど、あたしはあなたに食べてやられる気はないわ。あなたを倒して、この先に行く。あたしには目的があるから」

私は強い意志を秘めた瞳で魔物を睨むと、魔物は両腕を大きく広げ、けらけらと笑い出す。

うねうねと蠢く両腕のツルが嫌に不快だ。

「そうかい、そうかい。しかあし、お前がどうあがこうと俺の双腕からは逃れられないんだなもし。覚悟するんだな」

どうあつても私を食べたいらしい。

食うか食われるかの状況であるのに、私は酷く落ち着いている。恐怖という概念が姿を見せない。今の私ならば何でも出来るのだという自信に満ちている。

その理由には、タイゾーの存在も大きいのかも知れない。……認めたくないけれども。

「うらあっ！」

魔物が私に向けて大きく右腕を振るう。

鞭のように迫る奴の触手を私はしゃがんで回避する。それを見た魔物は続けざまに左腕で大きく振りかぶってくるが、私はその攻撃

も難無く横に移動することで避ける。

あの攻撃は受けない方がいいだろう。何より棘のダメージが痛そうだし、そのまま絡みつかれて捉えられる恐れがある。

つまり、私に与えられた戦法は絶対回避。

「――足がガラ空きだったの！」

隙を見て私は大きく距離を詰める。と同時に魔物の足に回し蹴りをヒットさせた。

奴の足は腕と違って大きく発達しているわけではなく、細い。

そんな脆い箇所¹に打撃を食らったおかげで魔物は体制を崩してその場に倒れ込んだ。

「ぐあつ！」

魔物は大きく後ろに倒れ込んだ。その影響で洞窟の地面に頭を打ちつける。

その瞬間を私は見逃さずに近づく。

状況判断が遅れている今がチャンスだ。たたみ掛けるのならば、相手が崩れているこの一瞬が好機。

私は右腕を水平に手元に引き、倒れ込んだ魔物のお腹に一直線にめり込ませてやった。

「うがあああつ！」

洞窟内に木霊するように絶叫が響く。効いている。与えたダメージは大きいものだ。

[illegible]

[illegible]

★ ☆ タイゾー くん の 視点 ☆ ★

「ああっ、パソコンがフリーズしたっ!？」

なんたることだ。

せつかくレンドット山の奥地にまで辿り着いて、ボスを撃破できるところだったのに！

僕は机に座り、パソコンの前で項垂れていた。

このダンジョンはセーブポイントが無いから地味に痛い。また洞窟の手前からやり直しかよ……

にしても、ついていない。この洞窟、ボスのところに辿り着くまで最速でも二十分近く掛かるのに……

「きやあつ！」

クレアたんが部屋の一角にどさっと音を立てて落ちた。
いきなりパソコンが止まったものだから強制的にゲームの中から
外に投げ出されたのだろう。ごめんね、クレアたん。

「クレアさんの驚いた時の声……可愛い痛ててて！」
「う、うるさいっ」

クレアたんが僕の顔を抓る。

頬を染めて悔しそうな顔をしていた。こ、これはデレ顔だ！　これは勝てる！　別に何に、ってわけじゃないけども！

クレアたんが僕の前で顔を赤くするなんて初めての出来事だったもんだから無性に嬉しい。

何がどうなったのかをクレアたんに説明すると、彼女はとても残念そうな顔をしていた。

「ああ、後ちよつとで勝てたのになー」

「あれ、クレアたん、記憶あるの？」

「ん？　あるわよ。ちゃんと殴った感触もあるし」

プレイ途中でぶつ切りになったクレアたんだけど、消える直前までの記憶がどうやらあるようだ。

ということはもしかしたらセーブしておいていくらか進めた後にロードをするとそこまでの記憶が残っているのかも………なんてことが頭に考えられたけれども、今回の場合は意図的に行ったわけじゃないし、なんとなく試すのが怖いのでやりたくない。

「さ、もう一度やるわよ。タイゾー」

「え、またやるの？　今日はもう冒険はやめて、お茶にしない？」

「ダメよ。なんかキリが悪いじゃない。あいつを倒すまではやめない！」

案外クレアたんは頑固であった。まあ、そんな彼女の我が儘にも付き合っちゃうのが僕である。

僕はフリーズしたパソコンを再起動し、レイド・オン・サタンのアイコンをダブルクリックして起動。

再度クレアたんの冒険が始まった。

■
本来は薄暗く、常人では何も見えない闇の空間——そんな洞窟の奥地も、私の今の目ならば見渡せる。

ごつごつとした岩肌に囲まれた駄々広い空間に私はいる。

レンドット山。魔王が住むと言われる根城に辿り着くためにはこの山内を通過しなくてはいけない。

本来ならば楽に越えられるはず……なのだけれど。

………っていうか、一回考えたことを何で考えてるかな。

「くく、これはこれは美味しそうな女がやってきたぞなもし」

私の目の前には魔物が佇んでいた。っていうか、ぞなもしって何よ。どこの言葉。魔物の間で流行ってるの？

人型に近い魔物で大きさとしては大の男、と言ったところである。しかし、両腕の肘から先がツルのようになってるのでそれを駆使して頑張る生物だと思う。

口はハッキリ言ってグロい。あの口にだけは弄ばれたくない。

こいつはレンドット山の山間を通過するために掘られていた洞窟の中心を根城にし、通行人の人々を襲っていたのだという。

おかげで周りにはつい先日まで体温が通っていたのであろう、力尽きて血に伏せている人達が幾人も在る。

その中には既に骨と化し、生前が男女のどちらであったのかすら判らなくなっている物も居る。

そんな酷い光景を見ても、大して心身が揺らがない今の私は果たして正常なのだろうか。

数多の魔物を倒してきたせいで、感覚が麻痺しているのかも知れ

ない。

いや、でもきつとこれは推測だけど——あの魔物に同情したからというのもあると思う。

あいつはきつと、悪いことはしていない。

自分の主食がただ、『人間であった』という事実が、私達人類にとって耐え難い不快な存在であっただけ。

裏を返せば、私もきつとやっていることは同じなのではないだろうか？

……考え直すと、大分ポエマーぶった思考をしているなあ、私。相手の心を読む魔物とか居たら、やだなあ。

「残念だけど、あたしはあなたに食べてやられる気はないわ。あなたを倒して、この先に行く。あたしには目的があるから」

なんか私、さっきと同じ事言った！ 別のこと言おうとしたのに出来なかった！

「そうかい、そうかい。しかあし、お前がどうあがこうと俺の双腕からは『致命的なエラーが発生したため、＜レイド・オン・サタン＞を強制終了します』」

★☆タイゾーくんの視点☆★

強制終了。それはどう考えても得する人の方が少なそうな単語。坦々と、僕の時間を奪っていった。

クレアたん、ごめんよ。せっかくまたボスのところに着いたとい

うのに、原因不明のエラーで処理落ちしたよ。
なんなんだろうね、一体。僕が何をしたというの。

「げぷっ」

唐突に現れたクレアたんが地に伏せた。なんか変な声が出る。
そんなクレアたんに僕は急いで駆け寄り、「今度は何よ!」という彼女に事情を説明。

酷く納得のいかない表情をしていた。

「今度は戦う前に終わったわよ!?!」

「今日はどうやら厄日みたいだね……。しょうがない、続きはまた今度に……」

「いや、やるわよ」

「えっ?」

クレアたんは諦めてなかった。情熱とやる気に満ちあふれていた。
何がなんでもあのボスを今、倒したいらしい。

確かに僕にも諦めきれないっていう時はある。こうなると意地だ。
今回はダメージの負ってないクレアたんが出て来たから良かったものの、ダメージ負ってる状態でゲームが途切れたら、血塗れのクレアたんとか出てこないよね?

このゲームは基本的にセーブする時は回復ポイントと一体化なので、強制終了とか無い限りはクレアたんは体力が満タンの状態で出てくるはずなのでそこら辺は安心だ。

それにクレアたんにダメージなんて、出来る限り、何が何でも僕が与えさせない。

僕との些細な雑談の後、クレアたんは再びゲームの中へと足を進ませた。

■
私は力をもらったおかげで暗闇でも目が利く。
ここは洞窟。

「くく、これはこれは美味しそうな女がやってきたぞなもし」

私の目の前に、魔物。
手がツル。口が怖い。気持ち悪い。

「残念だけど、あたしはあなたに食べてやられる気はないわ。あな
たを倒して、この先に行く。あたしには目的があるから」

勝手に私の口から出る言葉。
やっぱり限定なんだ、この台詞。私に選択権は無いんだ……

「そうかい、そうかい。しかあし、お前がどうあがこうと俺の双腕
からは逃れられないんだなもし。覚悟するんだな」

ふん、私に勝てるかなもし。って、口調移った!?

「うらあっ!」

魔物が私に向けて大きく右腕を振るう。

私は後ろへ大きく飛んでそれを回避した。敵との間合いを充分に
取った私は右手に強く力を込めた。

よし、やってやるか。

「はあ————！」

私は右腕を抱えて全神経をそこに集中させる。

すると私の右腕を覆うように漆黒のオーラがぼんやりと現れた。

右腕を大きく後ろに引いて構え、そのまま投げ付けるように奴へと拳を振りかざす。

「飛痛撃————！」
ラッシュ

私の右腕から放たれた飛ぶ拳撃は目にも止まらぬ速さで宙を駆け、魔物の胴体に華麗にヒットした。

その一撃を受けて吹き飛んだ魔物は洞窟の壁に打ち付けられ、少しの間よろよろと覚束ない足取りで立ち上がりとする素振りを見せたが、そのまま倒れて気絶した。

私の攻撃による一撃で戦闘はあっけなく幕を閉じた。

「ま、こんなところかな」

こうなることは見えていたけれど、あまりにも上手くいったので多少顔がニヤける。

私の力は本物だ。これなら魔王だってきつと倒せる。

安堵の気分に浸った私は周りの光景に目を向けた。

死体。

あの魔物に吸い尽くされて絶命した人々が、あちらこちらに点在している。

………もっと早くここに来ていれば、助かった命もあったかも知れない。

でも、そんな考えは意味がない。そんなたれば思考はいらない。

魔王を野放しにしていれば、こんな光景に世界が埋め尽くされる。それだけは何としてでも止めなければいけない。

もし、この蹂躪された人々の中に私の知っている人が居たのなら、こんなに平常心ではいられなかったと思う。

人は、自分に深く関わっていないことであるのなら、酷く無神経になれる存在なのか。そんなことを考えてしまう。

「はは、あたしってとことん勇者っぽくないなあ」

独り言を呟く。無論反応してくれる人はいない。

仲間の居ない、勇者。

魔王を倒そうとする勇敢な人間はおらず。ましてや私についてくれるような猛者もない。

私は、一人でやっていく。

「さて、これからも頑張らないとね」

私は洞窟の出口へ向けて、歩き出した――――

ぶっん。

★☆☆タイゾーくんの視点☆☆★

諦めなければ終わりじゃない（後書き）

現実の出来事が元になっています。

や、クレアたんはいませんでしたけどね？

クレアたんの一人称を私にしておけば良かったなと軽く後悔しています。

僕の何でもない過去(1)

「な、なにこれ？」

部屋の中。クレアさんは目を丸くして目の前の物体を見つめていた。彼女の手には週刊誌サイズの雑誌が握られていた。

「これはクレアたんが今まで掲載されてきたゲーム雑誌の数々さ！ほら、こっちなんて水着姿の絵があるんだよ！」

僕は雑誌をパラパラと捲ってクレアさんにドヤ顔で見せびらかす。饒舌な口調で。

「それだけじゃないよ、こっちの小雑誌にはクレアさんの初期段階設定絵があるし、この特典テレカになんてクレアさんのメイド姿が」

「ふんっ」

「あああああっ！？ 雑誌が真っ二つに引き裂かれた！？」

僕の宝物がクレアさんの両手によってお亡くなりになった。割と分厚い雑誌のはずだったんだけど、クレアさんが引き千切ることによって縦から一気に裂けた。

確か雑誌ってコツを掴めば非力でも真っ二つに出来るはずなんだけど、今のクレアたん、確実に力のみでいったぞ……

「うう、悲しいけど……まだまだあるし」

「へえー？ 出してくれるかなあ、タイゾーくん」
「え」

クレアたんは史上最大級の笑顔を浮かべていた。しかし、なんだろう。クレアたんは笑っているはずなのだけど、僕の背筋はガタと震えが止まらない。

クレアたんの笑顔の奥底に果てしない“闇”が見えるのは気のせいだろうか。

「あたしのが好きなら、出してくれるよね？」

「ゆ、許してよクレアたん！　いくら大好きなクレアたんの頼みでも、クレアたんは渡せない！」

「いや、もう意味わかんないわよそれ！？」

これ以上クレアたんがクレアたんによって引き裂かれるのだけは死守なくては。僕は雑誌の数々に覆い被さって必死に守る。

「ていうかお兄ちゃん、そんなに買ってたんだね、ゲーム雑誌」

「バックナンバーを買い漁ったんだよ」

バックナンバーというのは雑誌の過去号のことであって、希望をすれば買うことが出来るものだ。

実は僕はゲーム発売前からクレアたんを知っていた訳ではない。恥ずかしながら、発売してから一ヶ月くらいした頃にミヨがプレゼントとして買ってきてくれたのがきっかけでハマったのだ。

なので僕がクレアたんに目覚めたのは遅めなのだ。

そのため僕はハマると同時に、クレアたんの特集されている過去号を買い漁った、ということである。（正確にはレイド・オン・サタンの特集された号だけだ）

「クレアたんという天使に気づくの遅れた自分自身が恨めしい！」

「ねえミヨちゃん、こいつ殴っていいかな」

「はいどうぞって言いたいんですけど、死ぬと困るのでなるべくな

「やめてください」

クレアさんの発見に遅れてしまった自分を自分で呪いたくなる。
もうこのパターンに疲れたと言いたげな顔をしているクレアさん
だった。

「ってか、なんでクレアさんはそんなに僕が嫌いなのかさあ！」

「いや、どこに好きになる要素が……」

僕は泣きそうな顔で絶叫する。クレアさんはまるで渋茶を無理矢
理飲まされた時のような顔をしていた。

そんなクレアさんは身を翻すと、びしっと僕に指を差した。

「というか、あんたの愛は重いのよ！ 確かにタイゾーがあたしを
好きだったことは伝わったけど、相手も同じくらい自分のことを
好きじゃなきゃ、その愛は一方的に通過するだけで嬉しくもなんと
も無いのよ！」

「そ、そうだったのか……僕はてっきりクレアさんへの愛は心の臓
まで伝わっているのかと思ってたよ」

「よくそこまで前向きに考えられるわね……」

客観的な意見を主張するクレアさん。が、ちよつと顔が赤らんで
いるのが萌える。

しかし、なんということだ。僕の思いはクレアさんに全く伝わっ
ていなかったなんて。僕は心に会心の一撃を受けた。

「ま、まあクレアさん。お兄ちゃんを非難するのもその辺にしとい
てあげてください。お兄ちゃんにもいろいろ事情があったから……」

ミヨが突然話に加わり、僕にフォローを加えた。うう、こんなと

きだからこそ妹の優しさが目に染みる。

「そういえばあんた……女の子に酷い振られ方したとかって、言っ
てなかったっけ？」

クレアたんが腕を組んで思い出したように過去の話を穿り返す。
よく覚えていたものだなあ。

「あー……クレアさん、その話は」

突然の申し出に、ミヨが顔を渋らせる。

「ううん、いいよミヨ。クレアたんがそんなに僕の過去を聞きたい
と熱望するのなら、僕は甘んじて自分の恥部をさらけだすよ」

「いや、特に希望はしてないんだけど……」

僕はなるべく思い出したくない過去の出来事に、脳内のカーソル
で焦点を当てた。

僕の何でもない過去(2)

僕は何と言いますか、中の下みたいな生活を送っていた。

幼い頃から何か大きな賞賛を浴びせられるような手柄を立てたわけでもなく。

だからといって、不足の事態や悪事をしでかすようなトラブルメーカーだったわけでもない。

喧嘩して、殴り合って、その後に肩を抱き合うような青春には出会ったことがなかった。

学校に一度でも通った人ならば解ると思うけれども、『運動、勉強、笑い』のどれか一つでも取り柄が無いと、自然と空気になりえるような環境だった。

でも空気ってまだ役に立つから良いよね。二酸化炭素とか言われ始めたら最悪だね。

毎日が虚空……とまではいかないけれど、僕の日常は青春なのに灰色であったように思う。

このまま高校生活も終わりかなあと思いかけていた時だった。

「ねえねえ、牧場くんて何してる人？」

唐突に訳のわからない質問をする女子がいた。

「高校生活してる人」

「あはは何それっ、面白ー」

席替えで近くなった席の女の子だった。右から三、前から二番目である僕の席の後ろに位置する子。確か名前は工藤明日香。

女子同士で話しているのを見かけたことが幾度となくあるが、笑

顔が多く、人なつっこい感じの人だったと思う。

白と紺のよくあるうちの学生服に身を包み、首もとまで伸びた少しだけ茶色がかった頭髮。

容姿は……可愛い。あんまり特徴のない顔立ちだけれど、少なくとも女子にあまり免疫のない僕が長時間話していると直ちに惚れてしまうくらいのレベル。

「質問が悪かったね。休みの日に何してるのかなーって思って」

「暇人に対して休みの日に何してるんですかっていう質問は、ある意味では拷問に近い質問だと僕は思うよ」

そう僕が言ってやると彼女はまた「えーなんでー」と大きく笑った。嫌みのない小動物のような笑顔だ。

「じゃあ、暇人なんだね、牧場くんて」

「うん。その通りだけど。面と向かって言われるとなんだかグサツとくるね」

小、中学生までは実は野球をしていた僕だが、高校まで来てやめてしまった。

すると一気に土日が手持ちぶさたになってしまった僕は休日の使い方に苦難した。

とりあえず今言えることは、ゲーム最高。

「うん、私もゲームとかするよ。クラッ○ユバンディクーとか全面クリアできるよ」

「マジで!?!」

なんとなしに出したゲーム話題だったけれど、意外なことに彼女は乗ってくれた。女の子ってコアなところでマニアックだったりす

るよね。

そんな何でもないきっかけで始まり、僕は工藤さんと話すことが多くなった。

男子ってのは単純なもので。仲の良い女の子が来ると日々の生活に張りが出た。

眠いだけでしかなかった起床もすんなりとこなせるようになったし、あまり好きじゃなかった勉強も頑張ってみようという気になった。

あれから僕は彼女とメール交換したりするようになり、日常の細かな出来事なんかを話したりするようになった。

単なるクラスメイトだとは思っていなかった僕は段々と、彼女に惹かれていった。

大変です。彼女とデートすることになりました。

メールで週末はお互いに暇だねという話をしていて最中に起きた出来事だった。

女の子とデートするのが初めてだったという僕は、普段読まないようなファッション雑誌を開いたりして服装どうこうにも気を遣った。（ミヨにダメだしを食らったりもした）

迎えた当日、工藤さんはベージュのブラウスにチェックのブリーツスカートというとても可愛らしい服装をしていた。

僕はというとブルーのジーンズに上は白地のTシャツ。上から黒いジャケットを羽織るだけというシンプルな格好にした。ミヨがあんまり主張しない方が格好良いよ！と豪語していたのを参考に取っ入れた結果だ。

こういうのは男がリードするものだろうと思っていた僕はなんとか工藤さんを楽しませようと頑張ってみたのだけど、初めてのデートでそううまくいくはずもなく。結果としてはただ街中をぶらぶら

するといふなんだか残念な結果に終わった。それでも工藤さんはとも楽しそうに見えた。僕ももちろん楽しかった。

「私、牧場くんのこと好きかも」

ある日、思いもよらない言葉が彼女の口から出た。正確にはメールの内容だけだ。

そ、それは何を求めているんでせうかと脳内に問い掛けたが答えは見つからない。当時の混乱ぶりといったらない。

この異常事態、僕は周りに相談という名の助けを求めた結果、『男なら突き進め!』という結論になった。

うん、なんていうか、僕の中でも思っていることは一つだったのだ。

純粹に彼女が好きでした。好きになるとその人の全てが好き、とはよく言った物だ。もっと仲良くなりたいし、色んなところに行きたい。そんな想いに駆られるようになっていた。

僕は彼女を放課後屋上に呼び出し、決意と覚悟を持って告白した。

彼女の返事は“ごめんなさい”だった。……あれ？

「あっはは! あいつマジでコクったんだ!」

次の日、教室に行くとき嫌な空気が僕の身を包んだ。

皆の視線が、僕に向けられている。しかし、その視線はとても歓迎できるような類の物ではなく、まるで動物園に持ち込まれた珍獣を流し見るような、そんなモノだった。

女子達はくすくすと笑いながら僕にちらちらと目を向けるし、男子達も集団でげらげらと笑っていた。

その笑いの対象が僕であるということは、確かめる必要も無かった。

「……」

僕が辺りを見回した先に、工藤さんがいた。

騒がしそうなギャル風の女子達に囲まれて、申し訳なさそうな顔をしていた。

僕はこの状況が何なのかを理解しようと頭を動かそうとしたけど、上手く動いてくれなかった。

するとそんな僕を前に、一人の女子が歩いてきて言い放つ。

「お疲れー。あ、何が何だか解ってないだろうけど、これってアレなんだ。そ、罰ゲームってヤツ。ぎやはは！ やっべー、笑い止まんねえ！」

「え——」

「ごめんねー、怒らないでね？ ちょっとした出来心で始めた遊びなワケ。良い夢見られたっしょ？」

もう一人のよく知らない女子がフォローするように加わった。テンションの高い女子独特の声色が僕の耳を覆う。……遊び？ 何が？

「あ、変に思われるとあれだから言っとくけど、アスカはまるでお前のこと好きじゃないから。そこは誤解すんなよな」

目の前の女子は吐き捨てるように言い放った。

いや、この状況で考えられるのって、そう多くは無いじゃないか。要は、あれだろう？ 僕って、なんか騙されたってことなんだろう？ 女子達のちよっとキツい、お遊びに。

つまり、工藤さんは別に、僕のことなんて大して好きじゃなかったっていう。別にどうでもよかったっていう。眼中に無かったっていう。

でも、はは、なんか、その、認めたくない、や。

その後、先生がやってきたことをきっかけに教室は静まりかえったが、氾濫する川の水のように行き場を無くした僕の心はざわついたままだった。

あの日々は、全部まがい物だったのか。元々僕は、彼女と釣り合うような人じゃなかったのか。僕は自分で自分のことを中の下くらいじゃないかなあとか評価していたわけだけど、本当は下の下だったのだろうか。

そう思うと絶望的に、悲しくなった。

「……むかつくわね、その女」

クレアさんは僕の話聞き終えると、非常に面白くないという顔をした。

目はまるで魔物を狩る前のように怖く、今までに感じたことのない負の怒気を含んでいた。

「そいつ、どこに居るの？ あたしが文句言ってきたてやるわ」

「い、いいよクレアたん。別にそんなことしなくて」

「そういう人の良心を踏みにじるような輩は大嫌いなよ、あたしは」

知っていた。クレアさんは芯の部分ではとことん正義の心を持った女の子である。強くて、勇ましい。

クレアさんは明らかに不機嫌になっていた。

「そうだよ、君は、弱い物虐めとか、そういうのが、大嫌いな子だもんね。よく知ってるよ。だって……だから……僕は、君が、好きになったんだもん……」

「タイゾー……」

「お兄ちゃん……」

なんかよく見るとミヨまでが涙目みたいになっていた。む、悲しませるつもりは無かったんだけど。傷つくのは僕だけでいいというのに、なあ。こんなんではお兄ちゃん失格だな。

そんなわけで僕は真実が不確かである三次元よりも、始めから裏切られていると解っている二次元に重点を置くようになった。甘い？ ま、いいじゃん。

僕は二次元だけで、生きていくのさ。

Aの街(1)

「したい」

僕はクレアたんをコントローラーで操作しながら、何気なく呟いた。

「クレアたん、したい」

「お兄ちゃん、そういう限りなくアウトな発言は慎もうね」

椅子に座ってレイド・オン・サタンをプレイしていた僕に、ミヨはジト目で対応する。

「何を言っているんだよミヨ。僕が言いたいののは、『クレアたん(心温まるような楽しいことが)、したい』ってことだよ」

「紛らわしいよ!」

「え、なにと?」

「え……それは……べ、別になんだって良いよ!」

何だか知らないけれども、妹が顔中を真っ赤にしていた。なんか変なこと言ったか、僕。

「だってほら、クレアたんとお出かけとかしたいじゃないか」

「その気持ちはわかるけど、危ないよ?」

ミヨが心配気な顔で言及する。確かに、ゲームの中から飛び出したなんて女の子が街を歩いていて、突っ込まれたりしたら厄介である。

ただでさえクレアたんは目立ちそうであるし。外でトラブルが起

きたりするとまずい。

「……良いことを思いついた！」

僕は立ち上がる。そうだ、クレアさんと外をエンジョイする方法……その方法を考えていた僕は、一つの妙案に行き渡る。

僕は身を翻してミヨを見つめ、思いを口にすることにした。

「ミヨ、お前——最初にクレアたんを見た時、自分が何て言ったか……覚えているか？」

僕の言葉に不意を突かれて「えっ？」と驚くミヨは思考を働かせてしばしの間悩む。すると答えが解ったのか、掌に握り拳をぽんと置き、閃いたような顔をした。

「え、えっと。デリ〇ル？」

「そっちじゃねえよ！」

正解！　と言おうとした僕は勢い余ってずっこけそうになった。我が妹ながらしっかりしているようでどこか抜けている。

「コスプレイヤー……そう言っただろう？　つまりだ、初対面の人にとって、クレアさんはコスプレイヤーに見えるというわけだ」

「ああ、なるほど……。でも、それがどうかしたの？」

ミヨはまだ理解していないようだった。僕は話を続ける。

「まだ解らないか？　つまり、クレアたんをコスプレイヤーがいても不思議じゃないところに連れて行けば……」

「あ——」

ミヨもようやく僕の思惑に気づいた模様だった。

そう、木の葉を隠すなら森の中、ってね。コスプレイヤーを隠すなら……そう、アキバだ！ あそこならばクレアたんを連れて行ってもおかしくないはずだ！ 我ながらなんという奇策！ 自分の有能ぶりに、思わず涙すら出てくるってものだ。

クレアたんと外出するという手筈は整ったわけである。

「えー……………それって、大丈夫なのかなあ」

「大丈夫だよ。お兄ちゃんの案だぞ？」

「うん、だから心配なんだけどね」

ミヨは『またこの馬鹿兄貴は……』みたいな顔をしていた。くそう。

「服は……そのままでもいいの？」

「そのままじゃなきゃ、クレアたんがコスプレイヤーを装うことが出来ないじゃないか」

「まあ、そうだねえ」

ゲームの世界の住人を、この世に連れ出す。考えてみると僕もちよつと不安になってしまった。クレアたん、人殺したりしないだろうか。

いや、その点に関しては大丈夫か。クレアたん、手加減するの上手いし。現に僕が死んでいないのがその証拠である。クレアたんが本気だしたら僕は恐らく塵と化すであろう、うん。

かくして、クレアたんと外に遊びに行こう作戦は決行された。

Aの街(2)

僕とミヨ、そしてクレアたんは三人揃って電車に乗り込んでいた。理由はもちろん、アキバへと行くためである。

クレアたんはまず外の世界が余りにも自分の知っている世界と違うことに驚いていた。

レイド・オン・サタンの世界は中世ヨーロッパのような木造、石造りの建物が建ち並んでいる。

それに比べたら住宅街が所狭しと建ち並ぶ僕の世界は彼女にとって幾分か不思議であろう。

道行く人々も皆一様にクレアたんをじろじろと見ていた。そりゃまあ、いきなり見かけたら驚くよなあ。

まず銀水色というべきサラサラの長髪の時点で目立つというのに、服装も黒い布服を着込み、その上にまるでピッコロ大魔王が着てそうな白いローブだものなあ。あのとんがった肩当てみたいなのは無いけど。ある意味レインコートっぽい衣装と言えなくもないかな、無理か。

というわけで、駅に辿り着くまでに大量の人から視線を浴びるわ、着いてからも目立つわで、目的地へ行くまでが鬼門であった。

(……なんか、すんごい見られてるわね)

電車内でクレアたんがぼそっと呟いた。

それもそのはず。椅子に座っている人、立っている人、皆がそれぞれこっちに視線を向けたり戻したりしている。何、この居たたまれない空気。……そういや、こんな感じの雰囲気、前にもあったなあ。

(お兄ちゃん……やっぱり無謀だったんじゃないかな)

（いや、大丈夫だよ。変な人がいるとしか思われてないからさ）
（それが嫌なんだよう！）

ミヨは早くも帰ったそうだった。頑張れ妹よ、人はこうやって成長していくのだから。

僕達は周りの視線という強敵の攻撃をなんとかいかくぐり続け、ようやく目的地へと辿り着いた。

駅構内を渡り、改札口を通り、外の世界に触れた僕は言いしれぬ達成感に包まれた。

「着いたー！」

「ここが……アキバ」

思わずガッツポーズをする僕。クレアさんは辺りをきよろきよろと見回していた。

さすがに人ごみが凄い。点在する電気系統のショップには大量の人が入っているのが見える。

それと、さっきまでよりもある意味で熱意のある視線に包まれた気がするが、気にしないでおう。

僕らはとりあえずぶらぶらと歩き、ゲームショップに入った。

「ほら、クレアさんのゲームがあるよ」

「やっぱり自分が写ってるってのは変な気分ね……」

クレアさんはゲームの箱を手取る。でかかと表記されたゲーム名の周りには各々のキャラクターが描かれている。その中にはもちろんクレアさんの姿もあった。

僕は辺りを見回す。するとミヨが物珍しそうにフィギュアコーナーを眺めていた。全身が漆黒で統一された長い刀を持つ女のフィギュアが佇んでいた。

お値段は一万円しないくらいである。思うのだけど、こういうフイギュアって一体一体手作りのだろうか。どうやってこんな複雑な形を大量生産するのだろうか。

「すごいねえこれ、物凄い細かく作ってあるんだね。そういえばお兄ちゃん、部屋にフィギュアって飾ってないよね？」

「クレアさんのフィギュアはまだ発売されていないんだ。出たらそれはもう、今すぐにでも！」

「この世界は謎だらけだわ……」

感嘆の声を上げるミヨとは逆に、クレアさんは頭を抱えていた。恐らく現実逃避の一種じゃないかと思う。

まあ、逆に僕が二次元の世界に行ったりなんてしたら、悩むかな。……大喜びする気がするんだけど。

……僕は三次元に絶望したみたいない心を抱えておきながら、なんで三次元になったクレアさんに大喜びしてるんだろう。

いや、クレアさんは元々二次元の世界の人なのだから、正確に言えば2・5次元なのではないか？ そこんとこ、どうなんだろう。

僕らは店を出た。通りをぶらぶらと歩き、次はどこへ行こうかな、なんて考えていた時のことだった。

「すみません！ 余りにも素晴らしいコスプレなもので！ その、写真撮ってもよろしいでしょうか！？」

カメラを手に持った青年が僕らに声を掛けてきた。緑色のバンダナを頭に巻き、少し小太りな脂ぎった顔。ヨレヨレに草臥れた衣服。昨今では珍しいとされるいかにもオタクだった。

どうやらクレアさんの写真を撮りたいらしい。素晴らしいコスプレってか、まさかの本人だものなあ。カメラマンが見逃すはずもな

い。周りに居る人も「あれはレベルが高い！」みたいな表情をしているし。

「ね、お兄ちゃん、まずいよ！」

どうしようかと悩んでいた僕だが、気づくと服の裾をミヨがちよいちよいと引っ張っていた。

「え？」

「ほら、クレアさんの証拠、残っちゃうじゃん！ 写真なんて撮られたら！」

「あ——」

やべえ。なんでそれに気づかなかったのか。

この世界に存在しない人物の写真が形となって残るって、よく考えてみると確かに良くはない。

それが原因でとんでもないトラブルに巻き込まれるという可能性も、考えられなくはない。

「お願いします！ 一枚だけで良いんで！」

「えっと……」

僕はカメラマンを前にたじろいでいた。……どうする？

なんか周りにもカメラ持った人が集まってきてるし。このままだと明らかにまずい。

「クレアたん、逃げよう」

「えっ？」

僕はクレアたんの手を握って走り出した。うわぁ、クレアたんの

手、暖かいなりい……じゃなくて。

ミヨの方にも気を配り、僕達三人は逃走を図った。

この人ごみである。上手く人の間をくぐり抜けて逃げれば振り切れるはずだ。

前に見える曲がり角を次々に曲がり、僕達は裏路地のような場所へと逃げ込むことで難を逃れた。

「な、何だったのよあれは……」

僕らはなんとかカメラマンから逃げ果せた。

僕とミヨはぜーはーと大きく息をついていたが、クレアたんはまるで疲れていないようだった。

「やっぱりクレアさんが目立つとまずいね。……逆に危ないんじゃないかなあ、アキバ」

「僕もこのチョイスに失敗を感じてきたよ……」

二人してアキバに出かけたことを後悔し始める。なんという浅はかな考えだったのだろうか。

周りを見る。……裏路地。裏路地だけあって、薄汚い。建物の間に位置しているだけあって狭く、所々にゴミが落ちている。

華やかな都会の裏側には、こうした場所があるのは当然だ。

「これからどうしようか？」

「うーん、そうだなあ」

ミヨが問う。今後の行き先に不安を感じているのだろう。まあ、あんなことがあった後だしなあ。

そろそろお腹がすいた。飲食店にでも入ろうか——そんなことを考えていた僕に、また難は訪れた。

「やあオニーちゃん。ちょっとお願いあるんだけどさあ」

「俺達にお金貸してくんないかなあ？」

僕らに二人の人間が近づいていた。お兄系の服に身を包んだ黒髪の短髪男に、ホスト風味の長髪の男。

彼らの発言を聞いた限り、僕達にとって良い人というわけではなさそうだ。

——オタク狩り。それに近い人種だろう。アキバのオタクをターゲットとするカツアゲ野郎ってヤツだ。

……僕のことをお兄ちゃんなんて呼ぶのは、ミヨだけでいいというのに。

「お金無いんだったら、そっちの二人を預けてくれてもいいよ？俺としてはそっちの方が……暇なんだよねえ」

「——っ！」

短髪男の心ない発言に、ミヨが僕の陰に隠れる。……ミヨを怖がらせやがって。

「ミヨとクレアさんに手え出すな！」

自分でも信じられないくらいの怒号が出た。——若干足は震えていたけれども。恥ずかしい。

しかし、中学生であるミヨに、コスプレイヤー（に見える）クレアさんに手を出すか。悪趣味な奴らめ。

「羨ましいなあ、両手に花じゃん、ボク」

「う！」

ホスト風の男に胸倉を捕まれた。くっそ、退かないぞ、僕は。せめて二人がどこか遠くへ逃げるまでは……

「ねえ、ミヨちゃん。あたしつてさ、目立たなければいいんだよね？」

「へ？ あ、ええ。そうですね」

「ここって、目立たないよね？」

「えっと……まあ、目立たないですね」

何やらクレアさんとミヨが後ろで話していた。と思った途端、僕を掴んでいた男が吹っ飛んだ。

……あ、そうか。僕、心配する必要ないじゃん。

吹っ飛ばされた男はそのまま強く建物の壁に全身を強打し、物言わぬ体となった。

「!?!」

いきなりホスト風の男が吹き飛んだことに驚きを隠せず振り向いた短髪の男。

しかし、気づくとその後ろに一瞬でクレアさんが移動していた。

見るとクレアさんの右手首から指先までにどす黒い謎のオーラが立ちこめていた。

スタン
「忌是通」

そのままクレアさんが手刀を短髪男の首にトンと軽く当てる。すると男は目の光を失い、全身の力を失ったようにその場に倒れた。さっきまで威勢の良かった男二人組は、一瞬の内に喋ることも動くことも出来なくなっていた。

「さ、離れましょうか」

クレアさんはニヤリと笑い、淡々と言ひ放つ。僕とミヨはしばらくその光景に呆然としていたが、頭が認識に追いつくとクレアさんに付いていくように裏路地を後にした。

Aの街(3)

「クレアさんて、カッコイイ!」

ミヨが目の色を輝かせながら喋る。

僕はファミレスに来ていた。お腹がすいたからというのと、落ち着きたかったからだ。

せっかくだからここでしか味わえないようなお店にしようかと考えたが、メイド喫茶はあまりにも飲食の値段が高かったので、やめた。

「私も武道とかやって、強くなれないかなあ」

「やめとけて。クレアさんは人の域を超えた強さだからね?」

ミヨが興奮気味に言う。僕はそんな妹を引き留めに掛かる。徒労に終わる道へ妹を進ませてはいけない。

「クレアさんみたいなお姉ちゃんが欲しかったなあ……」

「あたしもミヨちゃんみたいな妹が欲しいな」

対面して座っているミヨとクレアさんは二人してにんまりと笑う。とっても良い笑顔だ。

「お兄ちゃんも格好良かったよ。さっきの時」

「そうね、タイゾーにしては中々上出来だったわね」

二人の笑顔はいつの間にか僕に向けられていた。え? 僕、そんなに良かった?

困るなあ、でへへ。クレアさんに好かれ、実の妹にも好かれ。こりゃあ参ったぞ、これだからモテる男は困る。

「もしかして……クレアたん、僕に惚れた？」

「惚れんわ！」

クレアたんはそこ勘違いすんな！ という顔で突っ込んだ。やっぱ、そこはダメなんだ……僕は冥界の死神に死の宣告をされたようにブルーになった。

「ちょっと僕、トイレに行ってくるね」

そう言ってクレアさんとミヨを残し、席を立つ僕。

男子用トイレで用を足し、席に戻ろうと店内を歩いていた——そのときだった。

店内の一席に、見知った顔を見つけた。

「え——」

目線の先に居たのは、工藤さんだった。工藤明日香。僕のクラスメイトであり、僕が初めてデートをした女の子であり……初めてこっぴどく騙された、女の子だった。

工藤さんは他二人の女の子と一緒に席に座っており、仲良さそうに喋っている所だった。

そんな彼女を見つめていた僕。不意に視線を逸らした工藤さん。

——僕達二人、目が合った。

二人して固まる。……なんで、彼女がこんなところに？ あれかな。もしかして、彼女達は物珍しいアキバを散策しに来たんだろうか。詳しい事情は解らない。

工藤さんも物凄く驚いた表情をしていた。他に座っていた女の子

にはばれていないようだったが。

……僕は彼女から視線をそっと外す。やたらにもやもやした気分になった。あーあ、今まで楽しい気分だったのに。

僕は平常心を保ち、元の席に戻る。クレアたん達におかえりと出迎えられた。

その後、しばらく僕達は楽しい会話を繰り広げ、店を後にした。帰り際、彼女の方は振り返らなかった。

入り口で代金精算を済まし、僕らは店を後にする。

「牧場くん！」

お店を出て、数歩。突如後ろから……懐かしい声が響いたのだった。

「あ——工藤、さん」

「そ、その……謝らせて欲しいの！」

いきなり一人で店を飛び出してきた工藤さんは、くしゃくしゃに歪んだ顔になった。悲痛な表情で叫ぶ。

ミヨとクレアたんは何事かと驚いていたけど、後ろの方でそっと話を聞いていた。

「その、あの、許してもらえないかも知れないけど……。あれって、あの罰ゲームって、私の友達が考えたことで！ 私、本当はやりたくなかったんだけど、どうしても断れなくて——、牧場くん、学校にも来なくなっちゃったし……」

「……」

工藤さんは下を向いて話を続ける。その表情は重く、見ているこ

つちが痛々しくなるような感じだった。

ちらっと見ると、クレアたん達は遠く離れた場所から僕らを見守っていた。どうやら事情を察してくれたみたいだ。

「皆が結果を報告しろって言うから、恥ずかしくて断っちゃったけど、私、本当は——」

「いいよ」

僕は彼女の言葉を遮るように呟く。

「もう、いいよ。解ったから」

僕は努めて優しい表情を出すように頑張った。彼女は涙目でこっちを見ていた。

……ああ、彼女もずっと心を痛めていたのか。いやだねえ、すれ違いつてのは。ほんと、嫌になる。

「でもごめん、もう工藤さんとは普通に付き合えないと思う」

「あ——」

僕は真面目な顔で、それだけははっきりと告げる。

工藤さんの表情が瞬時にして曇ったけれど、僕は怯まずに言葉を続ける。

「別に工藤さんのことが嫌いってワケじゃないんだ。でも、僕にはもう、好きな人が居るんだ」

「……そっ、か」

「うん、その人は、強いんだ。凄く。大きな目標があって、その信念に向けて頑張っているからだと思う。僕には真似できそうもない、そんな——憧れるような人だ。僕は今、その人しか見ることが出来

ない」

僕はありのままの自分の想いを吐露した。偽りはない。過小表現、誇大広告無しの、僕のあるがままの答えだ。

「だから、工藤さんも気にしないで欲しいんだ。僕は今、元気だから。学校も……そのうち、行こうと思うし」

「あ……」

僕の話聞いて、工藤さんの表情に少し明かりが灯った。やっぱり、彼女には笑っている姿が似合う。

「また、学校だね」

「うん、ばいばい。またね」

工藤さんは目に涙を貯めながら、小さく僕に手を振る。良かった。これできっと……僕と彼女のわだかまりは消えたんだ。

僕は笑顔で工藤さんに手を振り、その場をゆっくりと離れると、遠くで待っていたクレアたん達に合流し帰路についた。

『バツカじゃないのアンタ（お兄ちゃん）！？』

帰宅後。「帰ったら話すよ」と二人に言っていた僕は、工藤さんとの事のあらましを語った。

するとクレアたんもミヨもありえないと言った感じで、僕を非難するのだった。

「な、なんでそんな二人して……」

「良いじゃん、付き合っちゃえば良かったじゃん！ 何が悪かったのさ！」

「そうよ、せっかく上手く話がまとまりそうだったじゃない！ アンタ究極の馬鹿なの！？」

ミヨとクレアたんの口から罵声の雨が飛ぶ。いや、愛のある罵声だけでも。

二人の言い分は工藤さんと付き合えば良かったのに、という物だった。

しかし、そんなことはできない。中途半端な気持ちで付き合うなんて、それこそ失礼だ。相手に申し訳ない。

「いや、だって今の僕は、クレアたん一筋だからさ！」

僕は親指を立ててニツと笑ってみせる。すると二人の顔が呆然と真顔になり、汚物を眺めるような物に変わった。

「クレアさん、一緒にお風呂にでも入りませんか」
「良いわね、そうしょっか」

急に笑顔になったミヨとクレアたんは顔を見合わせると、そそくさと僕の部屋から退室してしまった。

「え、ミヨ？　ちょっと、クレアたん。どうしたのさ！　ねえったら！？」

叫ぶ僕。しかしその声に二人が反応することはなかった。

あれ——僕——なんだか、すごいやつちまった感があるぞ。うん、大丈夫か？　なんか、人生における重大な選択肢を間違えてしまったみたいなの、この不安感は一切何だろう。

その後結局、僕の胸に去来する虚無感はしばらく続いたのだった。

弟

僕は結局、あれから学校へ復帰した。

過去の例によって行く気を失っていた僕だったけれども、何日もすると自然に学校へ行くようになっていた。

僕がやる気を取り戻したのはミヨとクレアたんによるところが大きい。

二人が発破を掛けてくれなければこうはいかなかったと思う。お母さんも盛大に喜んでくれた。……心配、かけてたのかなあ。

「さ、やるわよ、タイゾー」

そして今日も一日なんとか学校生活を終え、自室に入るとクレアたんが仁王立ちして待っていた。

そう、クレアたんは僕がゲームをプレイするのを待っていたのだ。僕が高校へ行っている間クレアたんは思いつき暇である。

なので最近はお母さんと家の手伝いをしたり、料理を作ったりと家に馴染んでいる。

「タイゾーだって頑張ってるでしょ。学校、行くようになったし。あたしも頑張らないと!」

「えー……いいじゃない、そんなに頑張らなくても」

「そうはいかないわよ。あたしには魔王を倒さなくちゃいけないっていう、使命があるんだから」

「そんなのいいから、後回しにしようよ」

「あたしの最大の目的が後回しされたっ!?!」

クレアたんはとっても張り切っていたのだが僕は相反するようにやる気がなかった。

このようにクレアたんが毎日僕を求める（変な意味ではない）ため、ゲームの方はかなり終盤の方まで来ていた。

「クレアさんの言うとおりでよお兄ちゃん。それにクレアさんは弟さんを探さないといけないんだよ」

後ろから声がしたので振り返ってみるとミヨが部屋をのぞき込んでいた。

最近のミヨはクレアたん側に付いている。……というか、元々そんな構図だった気もするんだけどね。

「……あの子、元気にしてるかな」

クレアたんが懐かしむように穏やかな微笑を浮かべる。

ミヨは興味津々でクレアたんの弟について聞いていた。……僕はどんなキャラなのか知っているけれども。

クレアたんの弟であるリック・リフィールはクレアたんに似ていなく、気が弱い。

正直本当に姉弟なのだろうかと言えるような感じなのだ。

「そういえばお兄ちゃんは、ゲームの内容知ってるんだよね？
つてことは、弟さんの居場所とかも——」

「うん、知ってるよ」

「……なんか変な感じだね、それって」

ミヨが言うとおりで、考えてみるととても変な話だ。弟の居場所だけでなく、これからクレアたんがどういう旅をしていくのかとか、全部知っているわけで。要するに、人一人の人生を熟知しているということだ。

僕は未来から来た人のようなものだろう。

「……あたしがたとえ弟の場所を聞いたとしても、今すぐ何とかすることは出来るの？」

「いや、ダメだね。ゲーム内の行動は制限されてるし、動かすのは僕だからクレアさんが自由に動けるわけでもないし、それに——」

「じゃ、いいわ。聞かないでおく」

掌を振ってこれからの出来事についての話を拒否するクレアたん。
クレアたんはゲームのキャラである。それはつまり、自由な行動が利かないのだ。

決められた出来事へ、決定済みの未来へ、歩いて行く。

クレアたんはそれでも前向きに考えているみたいで、全然気にしていない。

——それとも、ゲームのキャラだから、そこまで複雑に考えることが出来ないのか。

「……いいよ、クレアたん。僕を弟の代わりだと思って、抱きしめてくれてもいいよ」

「普通の姉は弟を抱かないと思うんだけど？」

クレアさんにジト目で睨まれる。

最近のクレアたんは暴力を控えるようになった。殴るのに飽きたのか、僕の言動に慣れたのか。……恐らく、後者。

「そういえば僕思うんだけどさ、人力を超えたような物凄いパンチが当たった場合って、人間が吹っ飛ぶのか、体を貫くのか、どっちなんだろうね」

「ん？ 試す？」

『やめてえ！』

僕とミヨが同時にクレアたん突っ込んだ。

そうだ、こんな感じで良いんだ。僕が馬鹿なこと言って、クレアたんがツツコんで、ミヨが宥める。そんな何気ない日常。

楽しい時間は、いつまでもずっと続けば、それでいいんだ。

決戦前夜

「やっぱり、クリアしたら戻ってこなくなるのかなあ？」

夜、僕はいつも通りパソコンに向かってゲームをしていた。それを横で眺めていたミヨが思うままに言う。

「……さあ、どうだろうね」

連日のプレイにより、ゲームの方は魔王との決戦前まで進んでいた。

ミヨが案じているのは、このゲームをクリアするとクレアさんは今後どうなるのか、ということだった。

ゲームのクリアを区切りとして、もう戻ってこなくなる可能性があるあるんじゃないかと言っているのだ。

「お兄ちゃん、なんだか元氣無いね？」

ミヨが心配して声を掛けてくる。僕は努めて「別に、いつも通りだよ」と返す。

心なしか、自分でも気づかないうちにネガティブオーラを出していたようだ。

「あー、お姉ちゃん欲しいなあ」

「それは……お母さんにもう一踏ん張りしてもらうしかないな」

「いや、物理的に絶対無理だよねそれ!？」

中々のオーバーアクションを見せる妹を尻目に、僕はゲームを終了する。

と同時、部屋の中にクレアたんが颯爽と現れる。

「よし、魔王まで後少し」

クレアたんが拳をぐっと握りしめて独り言を呟く。

ここまで特に不自由もなくやってきた。一度エンディングを迎えた僕にとっては二週目のプレイであるし、ボス等の対処法は掴んでいる。

クレアたんが負ける道理はない。

「いよいよですね、クレアさん」

「そうね。さすがに緊張するけど……あたしはやってみせる」

負けられない戦いを前に、強く意気込むクレアたん。

……やっぱり強いなあ、クレアたんは。

それからというものの、僕達は三人でいつものように雑談を交わし、眠くなったというクレアたんの意見を尊重してお開きになった。

クレアたんはいつもミヨの部屋で寝ている。ベッドに二人並んで寝るという姿は中々に微笑ましい。ちなみに寝ているクレアたんの寝顔は、わかりやすく言うところと天使。

いや、普段からずっと天使だけだね。

クレアたんがミヨの部屋に入る間際、僕は穏やかなトーンで呟いた。

「……ねえ、クレアたんさあ」

「んー？」

「クレアたんが魔王を倒してさ、世界が平和になっても――」

僕は家の天井を見上げ、少しの間物思いに耽る。

視線を下ろしてクレアたんに向き直り、そっと口を開けて。

「また、僕の部屋に戻ってきてくれる？」

願うように、告げた。

「やだ」

「ええっ!？」

「あははっ、冗談よ。心配しないで、遊びにくらいは来てあげるから。その時はあたしの弟も連れてきてあげるわ」

本気で驚く僕を前にクレアたんは指笑する。

また、やってくる。何気ない発言だけど……それはつまり、絶対に魔王を倒して弟を見つけ出すという意志が込められているような気がした。

それを聞いて安心した僕はクレアたと手を振って別れ、自室へと戻った。

「クレアたん、頑張ってね」

「クレアさん、ファイト!」

「任せときなさいって!」

翌日、気合いを入れるクレアたんを前に、僕とミヨは応援の言葉を投げかける。

僕はゲームを起動する。すると同時にクレアたんの姿はフツと音もなく消え去る。

クレアさんと僕による、魔王討伐が始まった。

R a i d o n s a t a n (1) (前 書 き)

>>この世に魔王が現れる少し前の回想<<

Raid on Satan(1)

一突き。二突き。

一蹴り。二蹴り。

何も無い空間に拳を突き出し、足による蹴りを浴びせるというのは地味な物である。しかし日々の鍛錬とはそういうものだ。

別段面白いわけでもない行為を何千万と繰り返し、それによって培われた努力が身を結んで力となる。

人間の体というのは面白い物で、使えば使うほど良くなる。それは体も頭も同じ事が言える。

勉学に勤しむことによって新たな数式を見つけ出したり、ぎこちない体使いでも毎日練習すれば舞踊を習得することが出来るように人は成長できる。

ただし修練するというのは中々に大変であるため、途中で心を折ってしまう人も多く居るけれど。

私は昔から頑張るといのが好きである。

頑張るといのは辛いことと戦うという意味があるのだろう。陰鬱な気分から始まって、希望に向かう言葉だ。

例えば目の前に困難が訪れようと、頑張りを続ければいつかは報われる物だと私は思っている。

「ふむ、クレアよ。中々に筋が良くなってきたな」

老年の厳格な声が私の耳に届く。

それを聞いて私は動かしていた体を一旦止め、その人の方に体を向ける。

バイス・ルドウェン先生。

私が教えを扱っている武術流派の先生だ。

年は六十を過ぎた辺り。頭髮は抜け落ちてはいないがその短髪は

既に全体が白である。

顔には真実を見通すような淡い色の瞳と深いシワが多く見られる。がっしりとした体格で背はあまり高くもないものの、威厳のある風格の先生だ。

そんな先生の元、私は今日も鍛錬を行っている。

私と先生、それ以外の門下生も麻作りの修練服を着て稽古に励んでいる。

此処、バース武術道場は三十人程度の門下生を抱えている拳法のみ流派。木造の広間に十数人の門下生が立ち並び、それぞれが型を取って動いている。

「本当ですか、ありがとうございます」

「うむ。しかしまだまだ甘い部分が多いな。改良の余地はいくらでもある」

考え込むように目を閉じ、苦言を告げる先生。相変わらず手厳しい。

「しかし、クレアよ。お前は弟と二人暮らしをしているそうだが……家の仕事が回らないのではないか？」

ふと思いついたように先生が口を開いた。家計と武道との両立は上手くいっているのか、という意味だ。

「正直言うと、あまり裕福と言えるような生活は出来てないですね。日々の生活で一杯一杯で」

私は溜息を漏らす。食費はかさむし、弟の学校の授業料だってバカにならない。

朝から昼間は仕事をし、夕方はこうして武道に励む。夜は学校か

ら帰ってきた弟を交え、家のことをやる日々だ。
少なくとも、楽な生活ではない。でも充実感はある。そういう日々。

「でも武道はやり続けます。武道は、あたしを高めてくれますから」

大変だけれども、私の好きなことだからやり続ける。もう武術の稽古は生活の一部だ。私とは切っても切り離せない感じなのだ。

「それに、人間で暇な時間が増えると、結局だらだらと過ごしちゃいません？」

「ほう……それは言い得て妙だな」

先生が私の持論に感心するように頷いた。

私はどちらかと言えば行動する派である。暇な時間があるのなら、何かをやっていたい気質。武道もそうだけど、体を動かすことが好きなのだ。

「ま、両立出来る理由の一つに先生の授業料が良心的っていうのがあるんですけどね」

「ふふふ、よく言うわ」

白い歯を剥き出しにして笑う先生。私はこうして先生とも気軽に話をする。

稽古をしている最中は厳格な先生だけれど、それ以外は割かし大らかで優しい。

「金がないからといって、変な仕事には手をださんようにな。……最悪な場合、手伝ってやらんでもない」

「え、変な仕事の紹介をですか？」

「違うわ!」

私の冗談に先生は喝とでも叫ぶように突っ込んだ。先生、案外面白い。

「お前の腕は買っている。弟子として、働かせてやらんでもないということだ」

「あ——」

先生の言葉に、一瞬呆然とする私。

要するに、私がもし職を失ったら先生の下で教育側として働く道を示唆してくれるということだ。

……有り難いなあ、本当に。先生には感謝してもしきれない。

私は深々とお辞儀をしてお礼を告げた。

Raid on Satan(2)

「ただいまー」

「お姉ちゃん、お帰り」

小汚いテーブルクロスが掛けられたテーブルの元、椅子に座って弟が私の帰りを待っていた。

リック・リフィール。私の弟。十二歳。

私と同じ銀水色で短めの頭髮。他人に威圧感を与えない素朴な顔立ち。

贅肉のない細い体つきで身長も同じ年代の子に比べて小さい。

「お姉ちゃん、疲れてない？ 今日僕がやるよ」

「いいから、あんたは座って待つときなさい」

変に気を遣う弟を前に、私は率先して夕食の支度を始める。

洗濯、お風呂の用意等、帰ってきててもやらなくちゃいけないことはたくさんある。

あまりにも疲れている場合にはリックにも手伝ってもらうのだけれど、だいたいの場合は私がやってしまう。

「今日の学校はどうだった？」

「うん……それなりに楽しかったよ」

私はスープの容器をかき混ぜながら適当に話を持ち出す。
すると弟からは元氣のない返事が返ってきた。

「……本当に？　なんか無理してない？」

「えっ、そ、そんなことないよ」

「……なら、いいけどね」

曲がりなりにも私の弟であるわけで、挙動を見ていればどんな気分なのかは大体解る。

でも本人が話したがないのならあえて突っ込む必要も無い。

「お姉ちゃんは、すごいよね。何でも出来て」

「なによ。やぶからぼうに」

いきなり弟が目の色を輝かせて尊敬するように言う。

不意を突かれたせいかな、なんかちよっと照れてしまう。

「僕、将来はお姉ちゃんみたいに立派な人間になりたい。優しい人って呼ばれて、頼りがいのある男になってみたい」

「何それ。好きな女の子でも出来たの？」

「ち、違うよ！ 僕にそんな女の子なんて出来るわけが……」

リックは顔を赤くし両腕を大げさに振って否定する。

随分と自分に自信がない模様だ。そんな弟の頬を私は肘で小突いてやる。

「うりうり。そんな根暗野郎だと彼女が出来ないわよー？」

「バカにしないでよお」

嫌がる弟を前に、私はニヤニヤしながらからかう。

私には両親が居ない。だからこうして毎日を弟と二人で過ごしている。

とても楽な生活だとは言えないし、寂しくない……とも言い難いけれど、弟と過ごす日々も楽しいものだ。

「純粹に、強くなってみたいんだ。だって強かったら、色々な事が
らたくさんの物を守ることが出来るじゃない。僕は、強くなってみ
たいな」

スープを口にしながら、リックが喋る。

弟の語る理想を聞きながら、私はふと思いついた言葉を口にする。

「ねえ、リック。本当の強さって、何だと思う？」

「え？」

いきなりの問いに、弟は頭を悩ませていた。

何を突然言い出すのと言いたげな顔は、しばらくして真顔に戻り
出す。

「それはやっぱり、今言ったように何かを守るような純粹な強さじ
ゃないかな」

リックはちよつと悩んだ末に答えを出す。

私はそれになるほどねえと相槌を打つと、弟を見据える。

「あたしの考えは、ちよつと違う」

私はずずとスープを一口啜り、言葉を続ける。

「私は、どんなに苦しいことがあっても——明るく前向きに生きて
いくような姿勢を言うんじゃないかなって、思う」

「あ……」

弟が何かに気づいたように驚く。

私が思う強さの信念はそれだ。何度苦汁を舐めさせられようとも、

常に立ち上がるような自分でいたい。そういう人間はきっと、間違
いなく強いはずだ。

「まあそれはそれ。リックの言うような強さももちろん大事ね。だ
からあんたも武道、やりなさい」

「そ、それは遠慮しとくよ」

「えー、なんでよ」

言ってることやってることが違うじゃない、と私は弟にぼやく。
その日も一日、談笑に終わるのだった。

「あんた、それどうしたの？」

「えっ？」

ある日、弟に異変があった。

帰宅した私は弟の顔をよく見てみると、頬の下に痣が出来ていた。

「こ、これは別に……何でもないよ」

「何でもなくはないでしょう。ちょっと、見せて」

私は強引に弟の顔を寄せてまじまじと見つめる。
明らかな青痣が出来ていた。

「学校で誰かに殴られたの？」

「……」

ばつの悪そうな顔でそっぽを向く弟。何かあったに、決まってる。それでもリックは口を割ろうとせず、黙ったままだった。

「……言いたくないんなら追求しないけど。ちゃんとお姉ちゃんに相談しなさいよ。虐められたりしてるんなら、あたしがぶっ飛ばしてやるから」

私の言葉を受けてリックはこくりと頷いた。

内心、心配で心配でたまらなかった。だけど弟の手前、私が気丈に振る舞わないといけないと思い、私は明るい態度を装った。

「ねえ、お姉ちゃん。ごめんね」

またある日。リックが食卓中に呟いた。

「いきなりどうしたのよ」

いきなり謝られて訳のわからない私は弟に問い掛ける。

ただ、リックは今日とても元気がない様子だった。

「僕、お姉ちゃんみたいに強くないみたい。弱いし、すぐ泣くし。……辛いことからはすぐに逃げたくなるような奴だし。家の仕事だってお姉ちゃんに任せきりで——」

「だーかーら。家のことは大丈夫だって言ってんでしょが」

陰気臭い弟を前に、私は少々荒めの言い方で告げる。

「それに、あんたは弱くない。あたしが保証する」

私は弟の手を握り、厳しくも愛情を込めた瞳で見据える。
納得したように頷く弟を見て、私はほっと胸をなで下ろした。

とある日の晩、私は夕食を作り始め、家の仕事を片付け、やることを終えた。

だけど、弟がいなかった。帰って、来ない。

普通ならば私が家に帰ってきた時にはもういるはずなのに。寄り道をするような子ではない。

まさか弟に何かあったのではないかと心配する私は家を飛び出して搜索しようと考えた。

すると、いきなり家の扉が開いた。

「すみません、失礼いたします」

見覚えのある人だった。そうだ、リックの担任の先生である。

紫色の長髪にメガネを掛けた若い女性の先生で、随分と申し訳なさそうにしている。

私は何事かと思ったが、とにかく先生を招き入れ、話を聞くことにした。

リックが、いなくなったらしい。

午前中の授業と授業の合間の休み時間、ふらっとどこかに姿を消し、そのまま戻らなかったのだそうだ。それで心配になって、先生は家を訪ねてきてくれたという。

私はここぞとばかりに、リックの様子が最近おかしいことや、痣を作って帰ってきたことを先生に問い詰めた。

すると先生はリックが学校で集団の男子に虐められていたことや、自分の家が姉と二人暮らしで貧乏だということを馬鹿にされていたのだという事実を語った。

私はどうにか出来なかったのかと怒り心頭に発したが、先生は何度も謝るだけで埒があかなかった。

とにかく二人で弟を捜し出すということになり、私は街の中を駆け巡った。

石畳の街路を、あてもなく。

当たり前かも知れないが、全然見つからない。何せまるで情報がない。

弟が行きそうな場所に心当たりがないし、道場や仕事場を訪ねてみても、やっぱり居なかった。

バイス先生も協力してくれたが本人を見たことがないのでいかにせん頼りにはならない。

自分と同じ髪色の少年だということだけを告げると、私はまた一目散に走り回った。

人に聞いては人に聞く。目撃情報がないかを確かめる。また探し出す。

私は走り回って、もう既に息が上がってしまっていた。見知らぬ家の扉に片手を付いて上がった息を整える。

「よー綺麗なお嬢ちゃん。今一人いー？」

わからない。なんで、どこに行った？

「この近くにいいお店あるんだけどサア、一緒に飲まない？」

私に相談しろって、言ったじゃない。あの馬鹿。

どこをほつつき歩いているのか。一体、今、どこで、何を……

「いやあ、こんな綺麗な子に会えるなんて、お兄さん感激♪」

大体の場所は回った。どこだ、他に、何かリックが行きそうな場所……思いつかない。

とにかく、行けるところはしらみつぶしに探して――

「というわけで俺と一緒に朝まで飲も」

「るっさいなっ！」

私はさっきからあだこうだとうるさい目の青年をぶん殴った。顔を殴られた青年は弧を描くように宙を飛び、遠くの地面に叩きつけられた。

そのまま、青年はぴくりとも動かなくなった。

「……え？」

何、今の。

私の拳はそりゃあ、鍛えているから普通の人よりは強いけど。あんな、男一人を吹っ飛ばせるような力なんてあるはずがない。というか男の力でも無理だろう。

何事かと混乱する私は自分の拳を見る。

「――ッ!？」

右手の拳の周りに、黒い蜃気楼のようなオーラが立ち籠めていた。

「こ、これは――」

ソノ、チカラデ

マオウヲ、タオシテ

「え……?」

突如、私の脳内に木霊するように無機質な声が届いた。
魔王を倒して、と。

力。そう、私はこの瞬間、力を授かったらしい。
常人がいくら努力しても辿り着けない境地に一瞬で私は辿り着か
“された”

その後、この世界に喧噪が巻き起こるのは、そう遠くなかった。

Raid on Satan (3)

この世は魔王が牛耳る世界となった。世界の各地に魔物と呼ばれる存在が蔓延したのだ。

魔物達は人間達を容赦なく蹂躪し、有無を言わせぬ状況に追いやる。

この世は闇に包まれた、誰もがそう思っていた。

「クレア・リフィールと申します。まずは突然の来訪をお許し下さい」

私は真紅の長絨毯に王の玉座、多くの兵士達が見守る謁見の間へと来ていた。

自由都市クロテアの街の奥部に位置するクロテア城。その城主サティス王の元である。

王様の前まで辿り着いた私は片膝をついて頭を下げ、深く礼をする。

「娘殿、頭を上げよ。如何なる用件であろうか？」

口を覆うように白く伸びた髭をさする王。庶民が着ることは一生無いであろう貴族の装い、金銀宝石を施してあるであろう王冠をしている。

「は、誠に信じがたい話かとは思われますが――」

私は用件を王に告げる。

今の私には魔王を倒すための力が与えられたこと。そのため魔王を倒しに行こうと考えていること。

王様はそれらの話を一字一句逃さないように耳を傾ける。

「王、このような小娘に何が出来ましょう？」

王の隣に立っていた一人の兵士が面白くなさそうに呟いた。

兵士の持つ長槍と武装している鋼鉄の鎧でかしゃりと音が鳴る。

「第一、門兵は何をしているのだ。このような庶民を誇り高き王城に招くなど」

右手を振って眉を大きくひん曲げる兵士。

……なんだこいつ。私の平常心に矮小な亀裂が入った。

「さっさと失せろ。ここはお前の来るような場所ではない」

「ふむ、落ち着くが良いベルク」

王様がベルクというらしい兵士に手を伸ばし、制止を促す。

その後、私を見てひとしきり頭を唸らせるように黙った王は、ゆっくりと口を開いた。

「クレア殿、気を悪くさせるかも知れんが、そなたの力というのはなんとも度し難い。その力という物の片鱗を見せて頂けないだろうか」

「……確かに、言葉だけでは説明に無理がありますね」

目を瞑り、納得したように頷く私。

私は悩むような姿勢を見せ、一刻の間を置くと、少し大きめの声で告げる。

「では、そちらの方を倒してご覧に入れる、というのはどうでしょ

うか？」

私のいきなりの提案に、城内の人間は目を見開き、静まりかえる。

「王様の側近をしていらっしやるのですから、さぞかし練度の高い方だと思うのです」

私はにこりと微笑んだ。それはもう私ができる限りの極上の笑みを。

それを見て目を丸くしていた兵士だったが、意味を理解すると酷く高笑いをする。

「舐めるなよ、小娘が。貴様のような輩に何が出来るといふのだ」

兵士が王と私の間に出る。よく見るととても大きな男であった。並の男を大きく超えた体躯、鍛え上げられているであろう骨肉。しかし精神の方は幾分か未熟なようである。

私は兵士と対面すると、少しばかり立ち位置を変えることにした。うん、この辺りなら王様が対角線上にならないから、安心ね。

「さあ、いつでも掛かってくるが良い。俺は優しいからな、お前から攻撃させてやろう。降参するのなら今のうちだがな」

槍を縦に持ち、構えも取らない兵士。恐らく私を舐めきっているせいである。

私は右手の拳をくるくると軽く回すと、少し力を込めて空に拳を放った。

「がっ!？」

拳が伴った空圧は真っ直ぐに兵士に吸い込まれるように飛び、彼の巨体を押し飛ばした。

衝撃を食らった兵士がそのまま後ろに大きく倒れる。

空圧のため見た目は透明。相手にとっては何が起きたのか解らないはずである。

その光景に城内がざわめき出す。

「て、てめえ……ふざけやがって！」

兵士が激昂したのか、真っ直ぐに私へと突進してきた。ふん、始めからそうしろっての。

その手に持っていた槍を突き立てる。が、私はそれを紙一重で横に避ける。

それを見た兵士はすぐさま手元へと槍を戻し、再度突く。

雨のような槍の閃撃が舞った。

「く、くそつ、なぜ当たらん！」

兵士は次々に槍の一撃を繰り出すが、いっこうに当たる気配はない。

それもそのはずだ。私には“見えている”。その一回一回の攻撃の軌跡が。

私の目は異常なくらい動体視力が強化され、槍の一閃が視認出来る。

また、その攻撃の乱舞を回避する動きも常人には真似できないだろう。

相手が『1』動く間に私は『5』動くことが出来る感覚だ。

攻撃の最中、突き出される槍の柄を私はがしりと掴みとる。

「う、動かない、だと……!?!」

兵士の顔に驚愕の色が浮かぶ。

それもそのはずである。鍛え上げられた兵士が両手で御している長槍を、女である私が片手で止めているのだ。

私はそのまま左手でも槍を掴み取り、両腕に力を込める。

「せやっ！」

私はその槍ごと男を空に持ち上げた。半円を描くように後ろの地面へと男を叩きつける。遠心力を伴って叩きつけられた男の衝撃は多大な物となり、城内に轟音が響いた。

「ごはあっ！」

鎧を着ているというのは、外部からの攻撃に対しては確かに強いだろう。

しかしこのように地面に叩きつけられた場合、鋼鉄の壁に身をぶつけるようなものだ。

槍から手を離れた兵士はよろよろと地面に手をつき、立ち上がる。何が起きたのか信じられない様子だ。

顔を上げる兵士。その視線の先には――

くの字に折れ曲がった槍の姿があった。

私はそれをぱいと兵士の元に捨てると、からんからんと小気味よい音が鳴る。

「ひ、ひいっ！」

兵士は完全に戦意を喪失したようであった。腰を抜かし、化け物

と対峙したような恐怖で顔をひきつらせる。

槍はもちろん私が曲げた物である。

この力を手に入れてから私は鋼鉄の棒を曲げられるようになったし、硬貨を指で変形させられるようになった。

「門番の兵士さんもこれを見せたら通してくださいました」

そう言って私は槍を指さし、屈託のない表情で笑う。

城内は静まりかえっていた。皆が皆、目の前の光景に認識が追いついていないようで固まっている。

ところがその静寂もすぐに一変し、ざわつきへと移る。

「ベルクさんが、やられただと……」 「なんだあの力は！」 「だ、誰も勝てねえよ！」 「あ、あいつが魔王なんじゃないのか!？」 「可憐だ……」 「あの子なら俺達を救ってくれる！」

途端に五月蠅くなった城内。思い思いの言葉を発してざわついている。

それを見かねた王様は両手で城内の人々を静まらせ、再び閑寂な空間に戻った。

「クレアよ。そなたの力は本物のようだ。お前になら魔王の討伐を任せられる」

「は、手荒な行為に及びましたこと、失礼申し上げます」

「よいよい、こちらこそ無礼な真似をしてすまなかった」

兵士をいなしした結果、王様は完全に私の実力を認めてくれた。

人々は私の見る目を変え、英雄のような扱いとなる。

私はその場で、弟の搜索を願い出た。魔王を倒す代わりに、弟を見つけるのを手伝って欲しいと。結果、世界は混乱に包まれている

状況、特定の人間に人員を割くわけにはいかないとの答えだった。
しかし、魔王を私が倒した暁には、その提案も飲んでくれるそうだった。

一筋の希望に包まれた人々を残して、私は城を後にするのだった。

「行くのか、クレア」

旅立ちの日、私はバイス先生に会いに行った。

この力を手に入れた日、その強大な能力に先生は心から驚いていた。

同時に、自分の生徒が手の届かない所に行ってしまったような寂しさもあったかも知れない。

「はい、魔王はあたしが必ず。それに、弟を探さないといけないので」

今の自分はこの力によって裏打ちされている。噂による魔王の強大さを打ち破れるとしたら、きっと私しかない。王国軍の人間ですら私に全く敵わないのだから、いかにこの力が化け物じみているかが解る。

私は先生としばしの間、話に花を咲かせた。

思えば、この武道場には本当にお世話になった。これから一旦離れることとなるが、いつかはまた戻ってきたい。

その時は私はここで武道を教える側として働きたいとも思っている。

武道は素晴らしい物だと、後の世代に伝えていきたい。

私は先生との話に区切りを付け、身を翻して歩き出そうとする。

「クレア」

その背を、先生が呼び止めた。

私は振り返って、先生の顔を見据える。

「辛くなったらいつでも戻れ。お前一人が頑張る必要は無いのだから」

厳しい顔のまま、先生は言い放った。

「はい！」

私はそれに大きな返事で返すと、街の外へ向けて走り出す。

広大な世界へ、魔王を倒して弟を探し出す大きな目標へと、私は旅立った。

魔王との対峙

魔王の根城は岩山の中にあった。

天を突き抜けるようにそびえ立つ岩山の内部、岩の壁に隣接するように建てられた巨大な城。

大理石で組まれ、上空には円錐状の黒い屋根。窓は特殊な加工がしてあるのか、中の様子が見えない。

そんな魔王城の中には一筋縄ではいかない強力な魔物達が城の内部を守護していたが、とても切り抜けられないレベルではなかった。次から次へと襲い来る魔物達を薙ぎ倒し、前へと進む。

長い探索の末、魔王の玉座まで辿り着いた。しかし、肝心の魔王がいない。

誰も座っていない魔王の玉座の裏、どこまでも続くような階段が設けられていた。

私はその階段を一段一段噛みしめるように登り詰め、光の差し込む最上段へと歩む。

そこは岩山の頂上だった。ごつごつとした岩が点在する景色が周りに広がる中、私が辿り着いた場所は円卓のように丸く設けられた石造りの足場であった。まるで闘技場のように開けた場所だ。

天気はすこぶる良かった。魔王と対峙するというのはなら曇天の雷鳴が轟く場が相応しいかのように思えるけれど、実際は澄み渡った空という青い世界が広がる美しい光景が目の前にある。

しかし円卓の端、快晴の空と似合わない異質な雰囲気放了た物がそこにはいた。

「よくぞここまで。歓迎しよう、強き者よ」

頭の中に響くような禍々しい声で魔王が告げる。

並の男程度の体格で細身。黄金色の菱形の仮面が頭部を覆ってお

り、顔は見えない。体には深紫の法衣じみた衣装を纏っている。戦士のような兜に魔法使いが着るような服という噛み合わない出で立ちが逆に怖ろしさを体現していた。

「あんたが、魔王ね？」

「そうであつたら、何だというのかな？」

魔王が首を傾げる。黄金色の仮面がくいつと傾く姿はなんだか滑稽だった。

「世界中の人間があんたのせいで迷惑してるわ。だからあたしはあんたを倒しに来たの。嫌とは言わせないわ。黙ってあたしに倒されなさい」

私は親指で自身を指さす。

その姿を見た魔王は硬直したまま微動だにしない。

かと思いきや少しの間を置くと、魔王が小刻みに体を震わせていた。

「フフフ……」

「な、何がおかしいのよ」

「いや、これは単なる興味なのだが」

体を震わせていた魔王は笑い声で喋り出す。その鼻持ちならない仕草に私は微量の不快感を催す。

「一つ問いたい。それは本心か？」

「え……?」

魔王は右掌を上向きに、そっと前に出しながら喋る。その意味の

解らない質問に私は頭を悩ませた。

「お前が心の底から“世界の人々を救いたい”と思っているのかと言っているんだよ」

「……はあ？」

魔王が口にしたのは戯れ言のような問いだった。私はそれに意味が解りませんという顔で答えてやる。

「当たり前じゃない。そうじゃなきゃここまで来るはずがないでしょうが」

私は腰に手を当ててふんぞり返る。

そんな私を見て魔王はまたくっくくと気味の悪い笑みを零す。

「いや、違うな」

一呼吸を置いて、

「自分にここまで来られる力があつたから……ここまで来たのだろう？ 仕方なく、だ。この事態を止められるのが自分以外にいない、だからこそ自分が出向く必要がある——そういう、消去法なんじゃないのか？」

「——っ!？」

「少しは思い当たるようだな。別に気にする必要は無い。君が他人を救いたかろうがたまるまいが、どちらにせよどうだっていいことだ」

「……」

私は奥歯を噛みしめて魔王を強く睨む。——確かに、奴の言うこ

とは一概に無いと言い切れない。

もし、この力を手に入れること無く、弟も失踪しなかったら……私は、日々をどう過ごしていたのか。

「お前の毎日は奴隷のようだ。働けど働けど度重なる重責がのし掛かるように、泥水に引きずり込まれるような毎日を抜け出すことが出来ない。両親は無く、日々は厳しい。将来の希望は見えず、つまらない毎日——うんざりするだろう？　それもこれも、お前に責任があるわけではないというのにな」

「っ、なんで、あんたがそんなことを……！」

「生という物は、もっと楽しんでしかるべきだよ」

笑いながら魔王は両腕を広げて掌を空に向ける。

「私にとって、この世界は逆だ。弱すぎる。何も私を遮るものがない。興が削がれたものだ。例えていうのなら、そうだな。住むところに困らず、食べる物にも事足りない。ただ死を待つだけの家畜になったような気分だな」

魔王は酷くつまらなさそうに言葉を紡ぐ。

「だから、君のような私と対峙できる人間が来てくれたことが嬉しいよ」

喜悦を込めた口調の魔王。

……こいつはつまり、退屈しているのだろうか。

自分が好きなことを好きなように、なんでもやってしまえるから、毎日を退屈に感じてしまうということなのか。

「お前はここまでやって来た。他に到達した人間は類を見ない——

要するに、人類の頂点だ。どうだい？　楽しいかい？　そんな生き方は」

「正直言ってやるなら、微妙ね。強すぎるってのは最初の内は良いかも知れないけど、飽きるわ。私を超えられる人間が居ないんだもの。張り合いが無くてつまらない」

「ククク、それはそれは。私と同じ意見のようだな」

私は力を手に入れた。しかし……それによって私の状況は大きく一変した。

人外を超える強さを手に入れたことで私は少なからず不可能を可能にすることが出来るようになった。

要するに、私は普通じゃなくなったのだ。

今ならばどんなに修練を積んだ人間だろうと赤子の手を捻るように倒せるであろうし、凶悪な魔物であろうと私には倒せない相手ではない。

この力がある限り、私は戦いにおいて負けることがない。

つまり、私を止める者は居ない、のだ。

「んで？　魔王さんはあたしを仲間にして、一緒に世界を征服したいとか言うんじゃないでしょうね？」

「いいや、そういう企みは毛頭無いさ」

一呼吸置いて、魔王は当たり前のように喋る。

「もとより、この世界に興味などないのだから」
「なっ……!!」

世界を続けることに興味は無いと、平然に言い張った。
私は苦い表情を浮かべて魔王を見据える。

「私が求めるのは人間の嘆きだ。力なき者がもがき、苦しむ、そういう姿を見ていたい。そのためなら私は人を殺すだろうし、助けもするだろう」

自分の悪趣味な信念を安穩と語る魔王。

その様は心の底から楽しそうに見えた。

「今一番の目的は、お前と戦うことだがな」

魔王がそう言い終えた刹那、私は背後に気配を感じて咄嗟に振り返る。

目前にいたはずの魔王はその一間に私の後ろへと回り込んでいた。背後から魔王の攻撃が注ぐ。魔王の攻撃は私と同じ、拳によるものだった。

高速の拳撃を間一髪で躲し、反撃とばかりに私は右手拳を魔王へと伸ばす。

「がっ！」

私が繰り出した拳は魔王の胴体を決る。感触は堅く、気持ちの悪いものではない。

食らって後退りする魔王は右手を胸部へと抱き抱え、嬉しそうに体を丸める。

「いい、いいぞ！ もっと私を楽しませてくれ！」

そう言い放った瞬間、魔王は私の元まで飛び掛かるように前進する。

振りかぶった右手を下ろすように私へ殴りかかる。しかし、その拳は途中で

息を潜めて止まった。

何事かと思案する私は気づくと横からの衝撃によって吹き飛ばされていた。

「うっ！」

油断した。拳にばかり気を取られていて、魔王が右足で蹴りを放っていることに気がつかなかった。

蹴りの衝撃で円卓の端の部分まで吹き飛ばされた私は膝を着く。

「おやおや、私の勝ちかな？」

「はっ、上等——！」

私は魔王の元まで一気に跳躍し、拳の連打を放つ。

無数に振りかざす拳を受けては止め、互いに反撃を繰り返す。

私は一瞬の隙を突いて、魔王の仮面を側面から殴り飛ばす——

そうして、どれだけ殴り合っただろう。

最終的に私達は両者ボロボロの状態になり、魔王は地に倒れ伏した。

私は、勝ったのだ。魔王を倒した。

仰向けとなり地に伏した魔王に私は近づく。

……再び立ち上がる気配は無い、と思われた。

がしかし、突如として魔王の体に異変が現れる。

魔王の体は徐々に小さく縮み、頭に被っていた黄金の仮面は中心で二つに割れ、中の顔を剥き出しにする。中に、『私の弟』がいた。

「————」

私の頭は現状をなんとか把握しようと努めたが、一向に上手く回

転しようとしてくれない。大きく目を見開いたまま全身が硬直する。
なんで、リックが、ここに。

「……お姉ちゃん、倒せたんだね。魔王を」

一拍を置いてゆっくりと細目を開けたリックがかすれるような声
音を吐く。

「リ、リック？ 何で？ 一体どういうこと!？」

力の無い弟の肩を抱き上げ、大きく揺さぶる。
体は軽かった。魔王の気配が消えるのと同時に、弟の生気も失わ
れたかのようにだった。

「はは、遊ばれてたんだよ。僕達は、魔王に」

消え入りそうな声で喋る弟の顔は死期を迎える人間のように弱々
しい。

「……遊ばれてた？ 私達が？」

「その通り」

「っ!？」

私の背後、上空に嫌な気配を感じて振り返る。

そこにはどす黒いオーラの塊が宙をふわふわと漂っていた。

「簡潔に教えてやろう。魔王は私が乗り移ったお前の弟。そしてお
前の力は私が与えたものだ」

嘲笑するように魔王が語り出す。

突然の説明に、私の頭はまたも混乱の渦に巻き込まれた。

リックが、魔王？ 私の力が、与えられたもの？

「くくく。壮絶な姉弟喧嘩、楽しませて貰ったぞ。せめてもの情けだ」

不敵な笑み声で私達を仰ぎ見ると、

「仲良く、逝かせてやる」

なんて、口走った。

すると、私の身体はいきなりずしりと巨大な岩を載せられたように重くなって。

突如、私は猛烈な吐き気に襲われた。

「がぶ」

絵の具が垂れるように、血が口から滴り落ちた。

身体の節々が壊れていく感覚を味わう。至る骨が崩壊を始める音がした。

私はなんとか言葉を紡ぎ出そうと努力する。しかし、無理だった。際限ない血反吐の吐き気が止まらず、言葉なんて口に出来る状況じゃなかった。

最後に言いたかったのは、目の前で目を開かないままの弟の安否だけでも、知りたいということだった。

その日。

魔王を倒したはずの、その日。

私は、絶命した。

面接

「え……な、何、この結末」

ミヨが画面を見ながら呆然と立ち尽くしていた。

僕達は二人でゲームのラストをプレイしていた。といってもミヨは僕が魔王を倒すところをただ横で見ただけだけど。

「クレアさんの強さは、魔王が与えたものだったんだよ」

僕は渋い顔で覇気の無い言葉を口にする。

クレアさんの強さは、魔王によるものだ。

魔王は世界に降り立ち、偶然一人の少年に目を付ける。力を渴望する少年、リック・リフィールに。

どうしようもない現実嫌いを覚えた彼は魔王を半ば受け入れるように手を貸し、共に世界への侵略を起こす。

そして姉、クレア・リフィールにも魔王の力を授けた。

正義感の強い彼女なら、きっとここまで来るだろうということを見越して試したのかリックの提案だったのか……定かでは無いけど。結果として、クレア・リフィールは魔王の力を使い続けた反動により、エンディングで死に至る。弟のリックも……

ミヨは苦痛の表情を浮かべていた。

僕はまだ彼女の顛末を知っていたから良かったけれども、ミヨにとっては初めての事実。ダメージは大きいはずだ。

僕の方だって、こうなると解っていても悔しいという思いが込み上げる。

何か方法は無かったのか？

どうにか出来なかったのか？
そればかりが頭に浮かぶ。

「クレアさん、戻ってくる？」

ミヨが涙目で問う。

僕は答えられずにいた。また戻ってくるなんて保証は、どこにもなかった。

現に、ゲームを終了させても、もうクレアたんはこの場に出てこなかったのだ。

僕の予想は当たっていた。

思えばクレアたんが来てから少し経って、僕の思惑は動き始めた。彼女が死ぬという結末を前に、ゲームをクリアするともう彼女は出てこられないんじゃないかって、思っていた。

だから僕はゲームの方を進めたくなかった。

いつまでもここにいてもらって、『いつか弟を見つけ出して魔王を倒す』という希望を持ち続けたままで、僕らの傍に居て欲しかった。

……だけど、今思うとそんなのは僕の勝手な個人のエゴだ。

クレアたんはいつでも前を見ていた。

遠い目標でも、いつかは手が届くと信じてやまない彼女だった。

だからこそ僕は彼女が好きだったのであり、そんな彼女の目標を後押ししてあげたいという気持ちと、いつまでもここに居て欲しいという想いがせめぎ合い、まごまごしていたけれど。

「あいつは……魔王は、クレアたん達を愚弄した」

僕の瞳には怒りが灯っていた。

クレアたんが戻ってこないという事実泣きに覚えるかと思っていたが、実際の僕に流れる感情は逆で。

「僕はこの魔王を許さん」

僕は静かに、けれど熱を込めた言葉を吐いた。

ミヨもうんと頷いていた。

「だからね、僕はこの魔王を作ったスタッフ共を許さないよ」

「……えっ？」

ミヨが頭にクエスチョンマークを浮かべて首をかしげた。

僕はミヨの方に体を振り返ると両手を大きく振って喋る。

「だってそうだろ！ こんな酷い結末を作った奴らに詫びを入れさせるべきだろ！ ありえないって！ どうして最後まで頑張らせて、こんなに酷い仕打ちをするの！ 鬼畜の所行だ！ ハッピーエンドが常識だろ！ 頭がおかしいと思えない！」

「えーと、お、お兄ちゃん？」

僕はヒステリックを起こしたマダムのように言葉を続ける。

そんな僕を見て妹は額に汗を垂らしているように見えるが、僕は構わなかった。

「でも、クレアさんを作ったのもスタッフさんなんじゃあ——」

「それはそれ！ そこらへんはスタッフさんグッジョブ！ でもそれとこれとは別問題だ！ クレアたんを生み出したというのはノーベル賞並の評価に値するけども、魔王を作り出したのはドアノブの静電気並にいらん行為だ！」

なんかもう自分でも支離滅裂な気がしていたけど僕は気にせず主張していた。

ミヨは他に言いたいことがあるけどもういいやという顔をしている。

「戦うよ、僕は。クレアたんを取り戻すために！」

僕は右手を振りかざし、ミヨに大きく告げた。



「牧場さん、どうぞ」

「は、はい！」

秘書のような方の声を合図に、僕は緊張に震えた足で立ち上がった。

告げられた通りにドアの前まで歩き、二回ノックしてから僕は失礼しますと声を掛けて入室した。

部屋の中には一つの長い木製テーブル。角には観賞用の植物が飾られており、僕とテーブルを通して対面する側には高そうなスーツに身を包んだ重役の方々が三人ほどいた。

どの方も座っていて、僕の方へと目を向けている。

「牧場さん、ですね。企画部門希望の」

「は、はい。そうです。よろしくお願いいたします」

僕は向こうの指示によって席へと座る。

今の僕は、スーツに身を包んでいる。何をしているかというところ、面接である。

レイド・オン・サタンを作り上げた会社の新入社員向けの、だ。

——あれから、月日が経ち、とうとうクレアたんが戻ってくることは無かった。

やっぱり、事の結末がああであったのでは、仕方が無い。どうしようもない。

だから僕は、一つの考えに至った。

作る側に回ろうと。あの展開をなんとかねじ曲げたいと。

入社することあのゲームの続編を作るかなんかして、とにかくクレアたんの運命を変えたかった。もしくは技術を盗んで改変でも——なんでもいい。

ミヨは目を丸くして僕の偉大な考えを聞いていたけれど、やると決めたら本気だった。

色んな事を勉強して、今日の日に備えた。準備は万端なはずだ。

「学生時代に打ち込んだものは？」

「キーボ……なんでもありません」

「？」

いきなりまずった。

重役の方（小川さん）の質問に思いつきキーボードとかいうボ

ケ回答を答えそうになった。ネットの見過ぎである。

僕は一つ咳払いしてから答え直す。

「それは……御社のゲーム、レイド・オン・サタンです」

僕は自慢するかのように告げる。

「僕はこのゲームの世界観、そしてキャラが好きであり、なんどもプレイしました。このゲームをやり込む度に、ゲームクリエイトという職業について新たな可能性を見つけられると思ったのです！」

「ほっほう。それはそれは、いいことですね」

重役さんが微笑む。よしよし、好印象だろう。

それから僕は存分にゲームの良さについて語り、自分がゲーム大好きであるということを伝えた。

面接は案外早く終わった。

「なんか、ゲームが好きな人は取らないゲーム会社って、あるら

しいよ」

面接から帰宅して、ミヨが不吉なことを口走った。

「……なんだって？」

「だから、ゲーム好きな人は採用しない会社もあるんだって」

僕はその言葉を聞き返す。

ミヨは高校一年生になり、短いツインテールをやめてセミロングの黒髪を垂らしていた。

が、今はそんなことどうでもいい。

「な、なんでそれを早く言わない!？」

「え、だってお兄ちゃん知ってると思ってたし、もしかしたら好きな人の方が取られやすいかも知れないし……」

「ま、まあ大丈夫だろ、うん」

僕は気丈を振る舞ってふんぞり帰る。

やれるだけのことはやった。大丈夫さ。僕は絶対に採用してもらえる。

そして作るんだ。クレアたんが死なない展開を。

僕の情熱は、誰にも止められはしないのだから。

死亡フラグというのは正しいもので、僕は面接の結果、落ちた。

「ダメだったよ、ミヨ」

「あ……」

届いた通知を開けて悲しみに暮れる僕を、ミヨは悲しげな顔で見る。

僕は視界が歪んでいくのを感じる。駄目だった。僕は採用されなかったのだ。

両手と膝を床につき、僕は絶望に包まれる。

「なんだよ、ちくしょう。クリエイティブな職場ですとか、全て嘘だ。本当は実力のある奴しか取ってくれないし、まして取ってくれても使ってくれないで終わるのがオチなんだよ……」

急に訳も無く会社が憎くなって、意味の無い暴言を吐露する。

結局僕は採用すべき人材では無かったということだ。

そう考えてると、酷く悲しい気分になった。自分が情けない。

「うつつ、ミヨ。僕は本当にダメな奴だ。いつも失敗ばかりで。

今回だって……唯一の夢さえ、叶えられなかった」

「お兄ちゃん……」

僕は不覚にも泣きそうだった。クレアたんが消えてから一度も泣かなかったのに。

悲しみに暮れる僕の手を、ミヨはそっと握って持ち上げた。

「お兄ちゃんは、頑張ったよ！」

見ると、妹まで泣きそうになっていた。

僕が面接に至るまでの間、ミヨは色んな面でバックアップしてくれた。感謝してもしきれない。

だからこそ、落ちてしまったことが悔しかった。
今日この日を笑顔で迎えたかったのに。

余韻もなにもないエピローグ

こんばんは、ミヨです。

牧場泰三の妹です。

今日、私は信じられない光景を目の前に見ています。

友達と遊んで帰るのが遅くなった私は部屋につくと、お兄ちゃんの部屋が騒がしいということに気がつきました。

行ってみると、お兄ちゃんが泣いているのです。抱き付きながらその抱き付いている対象というのが――

「うあああつ、クレアたん、戻ってきて良かったよおお」

「離しなさいって言うてるでしょうが！ 恥ずかしい！」

号泣しているお兄ちゃんが赤面しているクレアさんの腰に手を回してすり寄っているというなんとも形容しがたい光景でした。

私は信じられずに目を丸くするばかりでした。

クレアさんが、戻ってきた。

「ミヨちゃん、久しぶり」

「お、ミヨ。帰ってきたか！」

「え、えっと、どういこと！？」

私が帰ってきたことに気づいて二人の動きが止まる。

どうして、クレアさんがまたここに――私は夢でも見ているのかと思った。

「実はな、修正パッチが出たのさ！」

お兄ちゃんが歓喜の声を上げる。

なんでも、クレアさんのゲームを作った会社がクレアさんのエンディングをハッピーエンドに修正するプログラムを無料配布したらしい。

それを当ててプレイした結果、クレアさんが戻ってきた……簡単に言うとは、そういうことだった。

「はあ、制作会社に『クレアたんが死なないパッチ出せ』って送り続けたかいがあったよ」

「お兄ちゃんそんなことしてたの!？」

お兄ちゃんは本当に変な方向に全力全開だった。

でも……こんな簡単に運命が変わってしまうのかと、私は煮え切らない思いだった。

作り手も、考えて作らないとね。

いや、でもゲームキャラが出てくるなんて予想するはずもないか……。

「あ、あの、初めまして」

「あ、初めまして」

クレアさんの後ろからひょこっと顔を出した子がいた。クレアさんと同じ髪の色で小学生高学年ぐらいかなあという見た目の優しそうな子。

何度か話に聞いたことのある弟さんだとすぐに解った。

「おお！ 僕の弟！」

「え。ええっ!？」

「誰があんたの弟なのよ！」

クレアさんの弟を見てお兄ちゃんはまた喜ぶ。

そんな姿に弟さんは若干引いていた。ごめんなさい、うちの兄が。

「あの、ありがとうございます。僕達を助けて頂いて」

クレアさんの弟さん、リック君がお辞儀をした。

今更ながら、ゲームの中の人に感謝されるって変な気分だね。

「というか、私達はほとんど助けになったかどうか……という感じ
だけ。」

「今回ばかりはお礼を言っておくわ。ありがとね、タイゾー。ミヨ
ちゃんも」

クレアさんが満面の笑みを浮かべる。

「どうやら一度魔王にやられたことも記憶しているらしい。」

私自身は特に頑張ったわけじゃないのだけど、クレアさんの喜ぶ
姿を見ているととても誇らしげな気分になった。

「が、クレアさんと弟さんの姿が突如消える。」

「跡形もなく一瞬の内に姿が見えなくなった。あのゲームを始めた
ときのように。」

「あ、あれ？ クレアたんはどこに」

いきなりの消失に戸惑うお兄ちゃん。

「……帰っちゃったんじゃない？」

「思いつきを告げる私。」

「よく考えたら、クリアしたんだから、どっちにしろもうクリアさん戻って来ないんじゃないか――」

「何それ!？」

私の言葉を聞いて、お兄ちゃんが床でのたうち回る。

それを見ながら私は苦笑していたけれど、唐突にお兄ちゃんは何か思いついたように立ち上がる。

「そうだ、今度は僕が向こうに行く方法を探そう!」

「え――」

「だってクリアたんがこっちの世界に来られたってことは、僕自身も二次元の世界に行く方法があるかも知れないじゃないか! 僕はその方法を追い求め続ける!」

「あの、就職活動は……?」

「そんなものの気にしないで前向きに過ごすよ!」

「それ思いつき後ろ向きじゃない!？」

「ミヨ、悪いけどお前は次のお兄ちゃんを捜してくれ」

「お兄ちゃんて見つける物だったの!？」

謎の情熱に燃えるお兄ちゃんを前に『ああ、うちのお兄ちゃんは一生このままなんだろうな』と思う私だった。

馬鹿は死ぬまで治らないってことだね。

でも、どうしてクリアさんはこっちの世界に来るようになったのかなあ。

もしかして未来のお兄ちゃんが開発した二次元と三次元を繋ぐ技術を過去の自分に与えたとか――

そんなはずないか。

まあ、一つ言えるのは。

お兄ちゃんは、魔王以上に狂気の溢れる存在だったってことかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9670u/>

なんかゲームしてたら武闘家少女が出てきちゃった

2011年12月3日19時50分発行